

2015年度町田市教育委員会

第1回臨時会会議録

1、開催日	2015年8月17日	
2、開催場所	市庁舎三階第一、第二、第三会議室	
3、出席委員	委員 長	佐藤 昇
	委員	高橋 圭子
	委員	森山 賢一
	委員	八並 清子
	教育 長	坂本 修一
4、署名委員	委員長	
	委員	
5、出席事務局職員	学校教育部長	吉川 正志
	生涯学習部長	田中 久雄
	学校教育部次長	高橋 良彰
	(兼) 教育総務課長	
	教育総務課担当課長	有田 宏治
	教育総務課担当課長	高橋 由希子
	施設課長	岸波 達也
	学校施設管理センター担当課長	桑原 一貴
	学務課長	田中 利和
	保健給食課長	佐藤 浩子
	指導課担当課長	石川 篤資
	指導課担当課長	藤原 広志
	指導課統括指導主事	熊木 崇
	教育センター所長	深澤 光
	教育センター担当課長	黒澤 一弘
	教育センター統括指導主事	高橋 博幸
	中学校教科用図書調査協議会会長	岩田 敏行

中学校教科用図書調査協議会副会長	天 利 公 一
中学校教科用図書調査協議会副会長	萩 原 和 彦
書 記	並 木 薫
書 記	小 泉 宣 弘
書 記	谷 山 里 映
書 記	田 中 みゆき
書 記	富 高 久仁子
書 記	藤 川 奈 央
速 記 士	帯 刀 道 代

(株式会社ゲンブリッジオフィス)

6、提出議案及び結果

議案第45号	2016年度使用教科用図書（中学校）の採択について	原 案 可 決
議案第46号	2016年度使用教科用図書(小学校)の採択について	原 案 可 決
議案第47号	2016年度使用教科用図書（特別支援学級）の採択について	原 案 可 決

7、傍聴者数 128名

8、議事の概要

午前 10 時 00 分開会

○委員長 ただいまから町田市教育委員会第 1 回臨時会を開会いたします。

本日の署名委員は森山賢一委員です。

それでは、日程第 1、議案審議事項に入ります。

議案第 45 号「2016 年度使用教科用図書（中学校）の採択について」を審議いたします。

教育長から説明をお願いいたします。

○教育長 それでは、議案第 45 号についてご説明申し上げます。議案件名は「2016 年度使用教科用図書（中学校）の採択について」でございます。

本件につきましては、義務教育諸学校の教科用図書の無償措置に関する法律第 13 条及び第 14 条並びに同法施行令第 14 条及び第 15 条の規定により、2016 年度使用教科用図書を採択するものでございます。

本年度、2015年度におきましては、公立中学校の採択替えの年度に当たり、町田市立小・中学校教科用図書採択要綱に基づき、教科用図書調査協議会を設置して、採択に必要な事項を調査・協議いたしました。先般、8月7日に開催いたしました町田市教育委員会第5回定例会における本協議会からの報告等を踏まえまして、教科用図書について採択をするものでございます。

説明は以上でございます。

○委員長 説明は終わりました。

ただいまの説明に関しまして、何かご質問などありましたらお願いいたします。――よろしいですか。

それではここで、8月7日の教育委員会第5回定例会におきまして、私から質問いたしました、社会の歴史的分野の教科用図書において「大和朝廷」の表記がいろいろあるが、どのように捉えているかという質問について、まずご回答をお願いしたいと思います。

○岩田中学校教科用図書調査協議会会長 そのご質問につきましては、事務局からご回答させていただきます。

○指導課統括指導主事 では、回答をさせていただきます。

「大和朝廷」の表記につきましては、文部科学省に確認したところ、学習指導要領が作成された当時から現在まで、「大和朝廷」に関する学術研究が変化してきていることが背景にあるとのことでした。学習指導要領に示している「大和朝廷」につきましては、その他の表記、「大和政権」や「ヤマト王権」などであらわすことは、全て検定において審議しているもので、問題はありません。また、どの表記がよいといった優位性もないとの回答をいただいております。

以上でございます。

○委員長 ただいま事務局から、調査をして文部科学省からの回答ということで説明していただきました。私の意見としましては、どの教科書を用いるかによって、子どもたちやそれを教える先生が、違う言葉で教えなければならない、学ばなければならないというのは、ちょっとおかしいなというのが前提にあります。もし学術的にいろいろ説があるということであれば、その説も含めて、どの教科書でも説明すればいいのであって、教科書ごとにどれかを選んでしまうというのは、私はちょっと違うのではないかなと思っています。

これは文部科学省や検定のところでの問題だと思いますので、もし私の思いに納得していただければ、またどこかで、そちらの方面に意見を伝えていただければありがたいと思

います。この問題についてはいいですか。

それでは、これから各教科の採択に入りたいと思います。採択本の決定方法についてはいかがいたしましょうか。

○教育長 採択の方法でございますが、実務的な部分でございますので、私からご提案申し上げます。

基本的に前回、2011年度の中学校の教科書採択、それから昨年、2014年度の小学校の教科書採択の際に採った方法と同様に、無記名投票による方法がよいと思います。先般、8月7日の教育委員会第5回定例会の際に、教科用図書調査協議会からの報告は既に受けておりますので、その報告内容も踏まえまして、各委員が意見を述べて、投票するというのがよいと思います。

なお、これも前回と同様でございますが、教育委員は5名でございますので、投票の結果、過半数、つまり、3票以上を獲得すれば、その教科書が採択されるということになります。その投票数が過半数に至らなかった場合でございますが、例えば2対2対1のような場合は、2票獲得した教科書会社2社で決選投票を行うこととなります。また、2票を獲得した教科書会社が1社だけで、あとは1票ずつの獲得が3社のような場合、これは2対1対1対1といったような場合でございますが、そのような場合には、まずは2票を獲得した1社を第1候補としておいて、残りの1票獲得の3社で再投票して、第2候補を決め、その後に第1候補と第2候補で決選投票するというように、いずれにいたしましても過半数を占めるまで投票を繰り返すという方法でございます。

私からの提案は以上でございます。

○委員長 教育長からの提案の内容は、1つは、無記名で投票する。それから、各委員が意見を述べる。そして投票ですが、5人で投票しますので、過半数、つまり、3票以上獲得すれば決定ということで、3票とれない場合には何度も投票を繰り返していく。細かいことは省略しますが、そういうところがポイントだったと思います。この方法について、いかがでございましょうか。よろしいですか。

(「異議なし」の声あり)

○委員長 ご異議なしと認め、教育長が提案した方法により決定していきたいと思っております。

それでは、教科ごとに審議をいたします。

まず国語の教科書から始めていきたいと思っております。投票に先立ちまして、各委員から意見をお願いしたいと思います。どなたかいかがでしょうか。

○高橋委員 国語に関して、私の考えるところを述べて、教科書について検討したいと思っています。

今を生きる子どもたちは、生まれて間もないころから多くの機器に囲まれ、限られた人とのかかわりの中で育てられ、一般的にコミュニケーション能力が低いと言われています。また、ゲームやスマートフォンの影響もあり、活字離れも指摘されています。学力の基礎であり、人格形成上大きく影響していく言葉の力をいかに育てていくか、重要な課題だと改めて認識して、教科書を調査研究いたしました。

5者のうち、教科書の装丁が大変美しく、手にとったら次々とページをめくりたくなったのは学校図書の教科書です。5者の中では読み物教材の数が最も多く、その内容も、中学生の今だからこそ読んでほしい感性に訴えかけ、心揺さぶられる作品が数多くあり、言葉の力を育てるだけでなく、人格形成にもよい影響を与えると感じました。また、ほかの教科書では巻末にまとめて掲載されているような読書教材も、単元の途中に入っていますので、知らず知らずに子どもたちが目にし、読むのではないかという期待があり、読書に親しむことにもつながっていくと思われまます。読むという領域が、ほかの領域より多くなっていますが、今を生きる子どもたちには必要な内容だと思っていますので、私は大変評価しています。

5者のうち、全ての領域をバランスよく学べ、総合的な国語の力が育つように構成されているのは光村図書出版と教育出版だと思います。特に光村図書出版は、教科書のために書きおろされた作品が幾つかあり、中学生にとって考えられた質の高い作品が目を引きまます。また、「読書コラム」を、宮崎駿、柴田元幸、森絵都という、中学生にとって身近で人気のある方々が書かれていることは、読書へ関心を持つには効果的だと思いました。私は4年前にも教科書採択にかかわりましたが、5者ともによりよい内容になっていることを知り、教科書会社の努力にも敬意を表したいと思います。

以上です。

○教育長 国語という教科は、学習指導要領の中では、言語活動の充実、伝え合う力、コミュニケーション能力の育成というのが重視されているということで、ほかの教科を初め、子どもたちの実生活にも大きく影響を与える教科だと思っています。そこで、基本的な話す、聞く、書く、読むという各領域のバランスを初め、子どもたちの自律的、継続的な学習意欲とか興味関心を引き出す工夫、そういった観点から見させていただきました。

もう1つ、これは国語だけではなくて、全ての教科に当てはまることですが、町田市の

子どもたちは、国や都の学力調査結果において、思考力とか判断力、表現力に課題があることがわかっています。そこで、課題に対してさまざまな意見に耳を傾けて、その意見をつなげてみずから考える力をつけたいということで、町田市の学力向上推進プランの中で協同的探究学習というものに取り組んでいるところですが、できればこのことについても、各学校の先生方が利用しやすいものを選びたいと考えています。

そのような観点で見たときに、今回は5者が教科書を作成されておりますが、私はその中で教育出版と光村図書出版が、生徒にとって、また先生にとっても使いやすいのではないかと感じました。この2者とも各領域・教材ごとに学習のめあてというのでしょうか、どのような力をつけたいかということが、他者と比較してわかりやすく明確に示されています。また、教育出版でしたら、「確かめよう」、「深めよう」、「考えよう」、光村図書出版でしたら、「確認しよう」、「読みを深めよう」、「自分の考えをもとう」といった学習コーナーを設けていて、課題解決的な学習についても充実していると感じました。加えて、光村図書出版が取り上げている教材、作品には、これは調査協議会からの報告にもあり、また先ほど高橋委員もおっしゃっておられましたが、現代作家による新しい文章、書きおろしの作品とか定評のある作品が多く取り上げられていて、これは子どもたちの興味を引き、学習意欲を引き出すのにも大変有効だと思いました。

以上でございます。

〇八並委員 私は全体として子どもたちに触れてほしい内容の教材、また、興味意欲を高めるような教材や資料があるか、また、よりわかりやすい構成、展開になっているかというような観点から調査研究いたしました。

国語の教科書は、どの教科書も、歴史、伝統、人権、環境など、子どもたちに触れてほしい教材が取り上げられておりました。中でも、日本語の美しさに触れる教材としては、光村図書出版の巻末見開きにある「色いろの言葉」、教育出版の章末にある「四季のたより」、東京書籍の章の扉にある「四季を楽しむ言葉」などが、それぞれ美しい写真やイラストなどととも言葉が紹介されており、大変興味深いと思いました。

また、高橋委員や教育長がおっしゃったのと同じように、子どもたちの興味関心を高める教材としては、光村図書出版が数多く取り上げられているように思いましたが、教育出版では、「言葉と仕事」というコラムに、水泳の北島選手を育てた平井コーチのお話、車椅子テニスプレイヤーの国枝慎吾さんのお話などが載っていて、これも大変興味深いと思いました。また、教育出版に載せてある教材の中に、「笑顔という魔法」という題材があった

のですが、これは私のモットーとしていることで、こういうことも子どもたちに触れてほしいなと思いました。

町田市が取り組んでいる読書活動については、光村図書出版は、1年次に「読書紹介をしよう」というコーナーがありましたし、教育出版、東京書籍には、3年次の発展課題の中にビブリオバトルの紹介が載っておりまして、どちらも読書活動に非常によいものではないかと思いました。

また、町田ゆかりの作家として八木重吉さんが挙げられますが、町田第三中学校の校歌を作詞された寺山修司さんも、町田ゆかりの作家の1人として授業で取り上げてほしいと思いました。

以上です。

○森山委員 国語は、今それぞれの委員からお話がありましたように、教科の非常に重要な位置付けがございますし、言語活動の充実という今の学習指導要領の中でのベースになるような教科でございます。国語を適切に表現し、正確に理解する能力を育てることが第一で、その上で伝え合う、そして高め合うということ、国語においては、特に重要視しております。このことから思考力あるいは創造力を養いながら言語感覚を高める、豊かにするという特色を持った教科であると理解をしております。

そういう中で、今回5者の教科書を研究させていただきました。どの教科書も、図、写真あるいはイラストなども非常に工夫がなされていました。

特にその中でも、先ほど来、各委員からお話がありましたように、例えば学校図書であれば、テーマごとの配列、課題、光村図書出版であれば、特に説明文とか、物語文については中学生の興味を引く、みずから読んでみようという内容が非常に厳選されていると判断いたしました。そのことは、とりもなおさず中学生の発達段階と教科書の内容が一致しているということになるかと思えます。

協議会等のご意見、あるいは教科書を使用される学校現場の先生方のご意見等も踏まえますと、私は、町田市における学力向上の取組においては、教科書が課題解決学習に資するものであることが鍵になっているのではないかと思います。そういう意味でも、光村図書出版あるいは教育出版の工夫は、まさに課題解決に資する教科書として非常に適合していると思います。そういうことから、まず1者は、光村図書出版の内容が非常にすぐれているのではないかと思います。また、教育出版につきましても、先ほどの課題解決あるいは表現については、特に国語における表現の修得という意味で表現の内容に深みを持たせ

るところに着眼して工夫しています。それから、東京書籍のいわゆる言葉の力、学び方、特にどのように勉強していくかというところに着眼した構成は、非常に理解しやすい内容になっているかと思います。

以上です。

○委員長 私からも一言述べさせていただきたいと思います。

これから申し上げたいことは、国語に限らず、全教科に言えることだと思いますが、1時間1時間の授業を進めていく際に、教師は教科書の内容を教えるということではなくて、教師が教えたい内容を、教科書を中心とする教材を使って教えていく、または学ばせていくということだろうと思っております。したがって、今回の教科書採択に当たりましても、教科書の内容がどうかということだけでなく、教師が使いやすいかどうかということも大事な視点の1つとして教科書を見てきました。

国語についてですが、国語の学習指導の内容は、話すこと、聞くこと、書くこと、読むこと及び伝統的な言語文化などとなっております。これらの内容、能力を高めるためには、説明的な文章にしても、文学的な文章にしても、教科書に取り上げた教材がどのようなものであるかということが最も重要であると思われまます。

それから、授業は教師と生徒とのやりとりの中で学習内容が深まり、学習意欲が高まっていくということを考えますと、教材を読み終えた後の教師の問いかけのタイミングとか、その問いかけの質が重要であり、もし教師が発問しようとしていることが既に教科書に書いてあると、新鮮味のある授業展開がしにくくなるのではないかと私は思います。そういう理由で、教材の後に示されている発問は、少な目のほうがいいのではないかと思います。

今私が申し上げましたような授業が進められるためには、教師の指導力があり、教材研究がしっかりなされていることが条件になることは当然であります。こうした観点から、ほかの委員さん方もお勧めしているようですが、私も教育出版あるいは光村図書出版の教科書が、他者の教科書よりもすぐれていると思います。

私からは以上ですが、ほかにご意見はございますか。――よろしいですか。

それでは、投票に入りたいと思います。

(投票)

○教育総務課長 集計が終わりましたので、発表いたします。

学校図書1票、教育出版1票、光村図書出版3票。以上です。

○委員長 ただいま投票結果の発表がありました。学校図書1票、教育出版1票、光村

図書出版3票ということで、光村図書出版が過半数3票を獲得いたしましたので、国語は光村図書出版に決定したいと思います。

続いて、書写に移ります。書写について、各委員からご意見をいただきたいと思います。いかがでしょうか。

○高橋委員 これからはパソコンやスマートフォンなどの普及に伴い、文字を手書きするという機会がますます減っていくと、私はある意味、危機感を持って感じていますので、この中学時代に、手で文字を書くことをしっかり身につけさせたい、また、手書き文字でしか伝わらない心のありようや魂があるということも感じてほしいと切に願っています。そこで、中学校で新たに学ぶ行書、日常生活で手書き文字を使う場面を想定した学習や伝統的な芸術文化としての書などがしっかり学べる教科書を選びたいと思い、調査研究してきました。

各者それぞれ特徴はありましたが、長い人生の中で最も使うであろう行書についてしっかり学べるという点では、教育出版が一番よいと思いました。行書と仮名を調和させて書くというところも詳しく載っていましたし、毛筆についても、濃淡のある朱墨で、筆の動きがわかりやすく解説してありました。

学校図書は、毛筆の学習を生かして硬筆の学習をするという点では最もすぐれていて、書の基本である臨書について体験するところまで取り上げられており、毛筆への興味関心が湧くような教科書です。

光村図書出版は、資料編が大変充実しており、日常生活での手紙、封筒、はがき、送り状、願書、のし袋の書き方が詳しく説明してありました。巻末にまとめて載せてあるので、保存しておけば、将来にわたり役に立つと思いました。

以上です。

○森山委員 それでは、書写について、調査研究の結果をお伝えしたいと思います。

書写というのは、文字文化に対する興味関心を高めていくことが非常に重要だと思います。そういう意味では、東京書籍の「新しい書写」については、教材資料について、文字文化に対しての興味関心が高まるような配列を組んでおります。

また、教育出版、学校図書につきましては、いわゆる毛筆と硬筆との系統というところを重視して、そこに教科書の特色を持たせていると思います。この2者は、系統性というところで非常に整理された教科書かと思います。

私は、基礎基本から発展的にいろいろな文字を学んでいくことの重要性というのは、書

写の時間でしか取り組めない内容だと思っています。そういう意味では、三省堂は、基礎基本の習得から系統的に学ぶという点で、すぐれていると思います。

光村図書出版につきましても、先ほど高橋委員のお話にもありましたが、写真とか、具体的で身近な題材を教科書の中に盛り込んでいて、興味関心が非常に高まるような教科書であると思います。

その中でも、私は冒頭に申し上げましたとおり、文字文化というところからの書写の重要な要点を明確に示している東京書籍の教科書が好ましいのではないかと考えております。

以上です。

○八並委員 私は、教育出版が、実生活で学習に必要な事例として、原稿用紙、レポート、手紙、ポスターや新聞など、それぞれ身近な題材を取り上げられているのは大変よいと思いました。また、硬筆と毛筆、楷書と行書、漢字と仮名などのバランスが非常によく構成されていると思いました。

以上です。

○教育長 書写につきましては、日常生活の中でも、硬筆とか毛筆、楷書や行書等、さまざまな書体、字体がある中で、子どもたちがそういう多様な文字に関心を持って、ふだんの生活や学習の中で、目的や必要に応じて、書写の能力を活用できるようにということが、学習指導要領の目標に掲げられております。

町田市では、毎年、新規採用教員を100名ぐらい採用しておりますが、若手の教員が増えているわけですが、今の若手の先生方は、もちろんキーボードでの入力の方に慣れていて、子どもたちも、習字を習いに行く機会なども昔ほどないと思いますので、子どもたちにもわかりやすく、先生方にも指導しやすいものという観点で見させていただきました。

今回5者あるわけですが、その中では、私は東京書籍と教育出版が、写真や具体的な事例を多用していて、子どもたちの関心を引き出す工夫が随所にあって、硬筆と毛筆ともに、解説がとても丁寧でわかりやすいと感じました。特に教育出版では、毛筆の楷書と行書の違い、筆脈、筆遣いの流れに関する写真と説明文がとても詳しく、教材ごとに用意されている「考えよう」、「生かそう」といった自主的な課題解決の質問内容がとても的確だと感じました。

以上でございます。

○委員長 私からも一言申し上げさせていただきます。

まず書写の授業について思うことですが、先ほど高橋委員が発言されましたように、生徒を取り巻く環境の変化を考えますと、やはりパソコンとか携帯電話の普及ということから、文字を書くとか、人に読みやすく書くとか、美しく書くとか、そういった意識とか経験が少なくなっているように感じておりまして、書写の授業はとても貴重ななと思いました。

それから、改めて学習指導要領を読んで、書写のところを見たのですが、書写には、とりわけ毛筆につきましては、どこかに芸術という観点があるのかなと私は思っていたのですが、学習指導要領では、芸術という側面は余り触れていなかったと思います。

そういう書写を通して、生徒が文字をきれいに、きちんと書くということの授業を進めるに当たって、今回5つの発行者から用意されている教科書には余り差はないと思いましたが。そうした現在の環境を考えますと、手紙、原稿用紙、ポスター、そういう実用的な場面で生かされることも学習の内容として必要になってきていると思いますし、毛筆にしても硬筆にしても、特に毛筆ですが、持ち方とか、正しい姿勢を丁寧に教えられる教科書がいいのではないかなとも思いました。このような観点から教科書を選ぶとすれば、私も東京書籍や教育出版の教科書がいいのではないかと考えております。

先ほども紹介しましたが、学習指導要領に示されている「内容の取扱い」というところには、「毛筆を使用する書写の指導は硬筆による書写の能力の基礎を養うようにする」とありまして、毛筆と硬筆との系統性、あるいは指導の順序ということを意識した指導も重要ではないかと思いました。その観点から考えますと、学校図書もいいなと思ったところがあります。

私の考えは以上でございます。

ほかにご意見はありますか。お互いに質問などさせていただいても結構です。自分の意見に引き込む意見でも結構ですので、どうぞおっしゃってください。——いいですか。

それでは、投票に入りたいと思います。

(投票)

○教育総務課長 集計が終わりましたので、発表いたします。

東京書籍 2票、教育出版 3票。以上です。

○委員長 ただいまの報告のとおり、東京書籍 2票、教育出版 3票で、教育出版が 3票獲得いたしましたので、書写は教育出版と決定いたしました。

続いて、社会（地理的分野）に入ります。先ほどと同じようにご意見をいただきたいと

思います。どなたからでも結構です。よろしくお願いします。

○教育長 地理、歴史、公民的分野を含めた社会科全体の教科の目標というのは、「広い視野に立って、社会に対する関心を高め、諸資料に基づいて多面的・多角的に考察し、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を深め、公民としての基礎的教養を培い、国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う」とございます。したがって、社会科の中の地理的分野については、日本や世界の諸地域の地域的特色の学習内容とか、さまざまな資料の中から地域的特色を読み取る際の視点や方法、そういうことが選ぶ際の観点になると思いました。

各者それぞれに特徴や工夫があるわけですが、まず前提となる本文とか資料、写真や挿絵、図表等の見やすさといった点から見ますと、私は教育出版と帝国書院が読みやすいと感じました。この2者について、東京都教育委員会が作成しております教科書調査研究資料というのがございますが、これで比較いたしますと、世界の諸地域ということにおいて取り上げている国々の数とか、宗教問題、環境問題、我が国の領土問題、東日本大震災に起因する防災とかエネルギー問題などについては、数や分量の上で、帝国書院は取り上げ方が薄いかなという印象を持ちました。

一方で、帝国書院の特色というか、一番違いを感じたのが、調査協議会の報告の中にもございますが、世界、日本、それぞれの「地域の調査」という章での解説で、各者は、例えば教育出版では、世界ではインド、日本では名古屋を例にして調査方法を解説しているところですが、帝国書院では、特定の地域の例を出さずに、方法論だけを丁寧に解説しています。これは特定の場所を例にした回答に頼らずに、方法論をしっかり学べるという意味で、先ほど来申し上げた協同的探究学習の実施にも大変有効だと感じております。

以上です。

○高橋委員 地理について私の意見を述べさせていただきます。

グローバル化が進む現代において、広い視野に立って、我が国の国土を世界の中で多面的、多角的に見ていくことは大変重要だと思っています。またそのためには、さまざまな資料に基づいて、地理的な見方や考え方を養い、日本と世界の諸地域がいかにつながっていて、どのような地球規模の課題があるかを知り、解決していくための手だてをみずから考え、持続可能な社会を生徒がみずから積極的につくっていく、そのような学習ができる教科書を選びたいと思いました。

4者ともに全般的にはよいと思いましたが、「世界のさまざまな地域の調査」と「身近な

地域の調査」という単元で4者を比べてみますと、東京書籍が、地域調査の手順がスモールステップで最もわかりやすく、どのように調べていけばよいのかを、中学生の発達段階に合わせて詳しく導いていると感じました。調べ学習は、みずからの課題を見つけ、調査し、課題を解決していく手だてを考えていくというようなアクティブラーニングにもつながる、社会科では基本となる大切な学習ですので、その基礎を、地理を学ぶ1年生のうちにしっかり身に付けることは大変重要だと思っています。その点では東京書籍は、調べ学習がきちんと学べ、最もすぐれていると思いました。また、写真やグラフや表などの資料も豊富で、しかも効果的に使われていると思いますので、私はこの4者の中では東京書籍を勧めたいと思っております。

以上です。

○森山委員 私からも一言申し上げたいと思います。

先ほど教育長のお話にもございましたが、社会科自体が、「諸資料に基づいて多面的・多角的に考察し」というところが非常に重要かと思っています。そういう意味におきましては、東京書籍と帝国書院については、資料の活用という観点から、生徒たちがしっかりと学習に取り組めるような工夫があるかと思っています。特に資料、地図とか、そういう細かい内容についての記載が非常に豊富だと思っています。あるいは協同的探究学習という観点から見ますと、4者の中では、教育出版、帝国書院、日本文教出版の3者については、生徒が学習するのにふさわしいような教科書の構成になっているかと思っています。

そのような観点からいきますと、この4者に特に大きな差はないと言えるかもしれませんが、ただ、その中でも特に東京書籍、帝国書院の2つの教科書については、もしかしたら、やや細かい内容が含まれ過ぎているのではないかという指摘があるかもしれませんが、先ほどの「諸資料に基づいて」という観点からは、非常にすぐれている教科書ではないかと思っています。

以上です。

○八並委員 私は、帝国書院は各章の導入が大変充実していると感じました。また、各地方、地域の広がりを感じられる地図を載せていて、例えば九州地域の地図としては、九州、沖縄、その先までということで全体を載せている地図が非常に印象的でした。

また、東京書籍では、比較的大きな写真が載せられているように感じ、高橋委員が述べられたように、日本の地域調べについて、その手順は大変わかりやすく示されていていいと思いました。

以上です。

○委員長 私からも一言述べさせていただきます。

4つの発行者が用意した教科書を比較してみたところ、それほど差はないように思いました。その中で私が注目したのは、教育出版が発行する教科書です。どういう点かといいますと、世界の諸地域を扱う場合、多くの教科書は、まずアジアを取り上げて学習するようになっていますが、その次を見てみますと、4者のうち3者はヨーロッパ、次いでアフリカという順序になっているのに対し、教育出版だけは、アジアの次がアフリカで、その後ヨーロッパという続きになっています。

これまでは、当然日本が含まれるアジアを除きますと、ヨーロッパとかアメリカに関する学習が豊かで、アフリカについては比較して少ないのではないかなと思います。私が不勉強なのかもしれませんが、アフリカにある国の名前をどれくらい言えるかということ、非常に少ないのは、多分私だけでなく、子どもたちも含めて、アフリカの国の名前も十分に言えない。つまり、アフリカの勉強が不十分であったのではないかなと、これまでを振り返って、私の思うところです。時代の流れを考えますと、今後はヨーロッパと同様に、アフリカについても、もっと学習する必要があるのではないかなと感じています。

それから、「世界のさまざまな地域の調査」という学習内容につきましては、先ほども他の委員からありましたように、ある国を例示して、調査方法とかまとめ方などを学ぶようになっております。ここでは例示する国はどこでもいいわけですけれども、教育出版を除く3者は、韓国とかロシアといった日本にごく近い国を挙げているのに対し、教育出版は、インドなど南アジアの国を挙げていて、世界に向けた視野を広げようとする意図が感じられます。こうした観点から、4つの発行者の教科書は、いずれも特別な課題はないとは思いますが、私は教育出版発行の教科書を推したいと思っております。

委員の皆さん、ほかにご意見ありますか。よろしいですか。

それでは、投票に入ります。

(投票)

○教育総務課長 集計が終わりましたので、発表いたします。

東京書籍 2票、教育出版 1票、帝国書院 2票。以上です。

○委員長 ただいまの報告のとおり、東京書籍 2票、教育出版 1票、帝国書院 2票で、3票以上入った教科書がありません。したがって、東京書籍と帝国書院で、もう一度投票を行いたいと思います。

投票前に何かご意見ございますか。よろしいでしょうか。

では、2回目の投票に入ります。

(投票)

○教育総務課長 集計が終わりましたので、発表いたします。

東京書籍3票、帝国書院2票。以上です。

○委員長 ただいまの報告のとおり、東京書籍が3票獲得いたしましたので、社会（地理的分野）は、東京書籍に決定いたしました。

続いて、社会（歴史的分野）に入ります。それでは、ご発言をお願いしたいと思います。

○高橋委員 歴史について考えるところを述べたいと思います。

東日本大震災が起きたとき、人々の落ちついた行動や避難所で助け合う姿、人のことを思いやる心や行動などの報道がなされ、日本は世界から称賛を受けました。中学生の記憶にも新しいことだと思います。私は、中学生が歴史を学ぶことで、改めて日本や日本人のよさを知り、日本人としての誇りと自覚を持ってほしいと切に願っています。と同時に、世界の国々と日本との歴史的なつながりを、広い視野に立ち、公平な立場で事実として知る中で、これからの日本がどのようにしていけば、世界の中でさらに尊敬され、国際社会に貢献していけるのか、歴史の教訓を礎に、みずからの考えのもと、1人1人が自分で判断する力を養えるような教科書を選びたいと思っています。

8者どの教科書も、日本史の中で、日本や日本人のよさを示していると思いましたが、特に育鵬社は、日本史における歴史上の人物や文化遺産を、ほかの教科書よりも数多く取り上げ、日本の歴史を学ぶという点では、より詳しく学ぶことができ、日本や日本人のよさを十分に学べる内容となっています。しかし、自由社、学び舎でも見られることですが、日本史と世界史との系統性について配慮が弱く、日本史に比べると、世界史の取り扱いが少なくなっている点が、広い視野に立つという点では大変気になるところです。

広い視野に立ち、日本史や世界史の系統性をよく考えてあり、なおかつ言語活動も取り入れ、歴史の教訓を礎に、生徒みずからが考えることができるようにつくられている教科書としては、教育出版と日本文教出版の2者がすぐれていると私は思います。教育出版は、全体的に中学生が理解しやすく、親しみやすい表現となっていますし、資料もわかりやすく、効果的に用いています。資料や郷土の歴史、人物や地域から歴史を読み取るようなコラムが数多く載っており、歴史を多面的に見ることができる工夫があり、興味関心を引く内容となっています。また、各章末のまとめのページが歴史年表となっていて、歴史の流

れを再確認でき、穴埋め問題にもなっていて、学習のまとめがきちんとでき、学力が定着していくような工夫もされています。

次に、日本文教出版は、「歴史をはかるものさし」が見開きの左端についていて、今の学びが長い歴史の中のどのあたりなのかがよくわかるようになっています。「とらえよう！時代の転換」のページでは、生徒自身が学んできた歴史を活用しながら考察し、みずからの言葉で表現していくというように、歴史をただ覚えるという学習ではなく、主体的な学びができる工夫もあります。また、自由民権運動の單元では、町田市の資料が使われていますので、町田市の地域学習をするときに、興味関心が高まると思います。

「先人に学ぶ」というページが8カ所あり、明治23年、和歌山でのトルコの軍艦エルトゥールル号の遭難事件が取り上げられています。エルトゥールル号の遭難時、檜野地区の島民が乗組員を救出し、献身的な看護をしたということから、その後、1985年、イランから約500人の日本人を脱出させるべく、トルコは日本のために航空機を飛ばしてくれ、日本人の命を助けてくれました。また、2011年の東日本大震災には、トルコは日本に救援隊を送るなど、日本とトルコは互いに命を尊重する国際協力が続けられていることが紹介されています。このような史実をきちんと伝えていくことは、私は、グローバル化していく世界の中の日本のあり方を学ぶ上でとても大切なことだと思っています。

以上です。

○八並委員 私は、東京書籍のものは、各ページの下に年表があり、今、学んでいる年代を意識しながら学習することができると思いました。前の章の終わりと次の章の始めが見開きになっており、続いた年表を載せていて、学習のつながりがすごくわかりやすいのではないかと思います。より深い内容を理解するためにある「深めよう」というコラムの記事は大変興味深いものでした。

帝国書院では、地図や写真などの資料が大変充実していると感じました。それぞれの歴史の事例に対して、さまざまな立場での意見を載せており、多面的に理解することができるのではないかと思います。章末にある見開きのイラストの「タイムトラベル」などは、子どもたちの興味を引き、学習の助けになるものではないかと思います。

日本文教出版では、先ほど高橋委員が述べられましたように、こちらはページの左側に年表がついており、こちらでも年代を意識しながら学習することができると思いました。重要語句が非常にわかりやすく載せられておりました。「先人に学ぶ」とか、「とらえよう！時代の転換」といったコラムの記事は大変興味深いものだと思います。

育鵬社では、導入部に「歴史モノサシについて」ということで、学習の目標を示しているのは大変よいと思いました。「なでしこ日本史」など、人物に関する興味深いコラムが多かったのも印象的でした。

以上です。

○**教育長** 歴史的分野の教科書については今回8者から出ているわけですが、実は教科書の巻頭から物語、小説を読むような感覚で引き込まれるように読んでしまったのが、育鵬社の教科書でした。これは私の年齢というか年代的に、昔習った記憶などに起因するもので、登場する歴史上の人物の多さとか、人名、知名、国名、事象などに昔習ったとおりの言い方、呼び方でルビが振ってあることなどによるものだと思いますが、まるで絵巻物のような構成の内容というのは、現代の子どもたちの興味関心も引くと思いました。

しかし、先ほど来申し上げているように、教科書を読んで、子どもたちが、ああ、そうですかで終わってしまっては困るので、日本史、世界史を多面的、多角的に学ぶ中で、子どもたちには現在の自分の立ち位置というものをみずから考えさせるという工夫が必要だと考えています。

そういう観点では、私は、育鵬社に次いで読みやすいのが帝国書院、教育出版だと考えています。この2者ともに、平易な文章であったり、漫画を使用したりして、子どもたちに親しみやすくする工夫があって、課題の発見、解決につながるような適切な設問が数多く設けられていると感じました。

特に帝国書院については、調査協議会の報告書にもあるように、「技能をみがく」とか、「トライアル歴史」といったコーナーによって、協同的探究学習にも大変有効であると考えます。加えて「地域史」というコラムの中で、多摩地域の自由民権運動の資料として、町田市自由民権資料館からの提供と明記されているところも、地元の所管部署としては誇らしく思うところでございます。

以上です。

○**森山委員** 先ほども申し上げたとおり、社会科という教科そのものの中で、「諸資料に基づいて多面的・多角的に考察する」、特に歴史の分野であれば、我が国の歴史に対する理解と愛情を深めるというところに中心が置かれていようかと思えます。

そのような観点から、今回の8者の教科書については、ユニークさ、取り上げ方、内容の濃淡、このようなところについてはそれぞれ特色があろうかと思えます。その中でも、特に歴史の中での系統性というところに観点を置きますと、東京書籍、帝国書院、日本文

教出版、このあたりについては、非常にわかりやすく系統的に歴史的な内容を網羅していると言えようかと思います。

また、先ほど来、各委員からのお話にもございましたが、育鵬社については、人物に焦点を当て、その中で、その背景にあるものというところで歴史を認識するという意味で、非常にわかりやすい記述であるかと思います。それぞれの発行者が生徒の興味関心を引いて、特に単純な記憶の集積にとどまらないような形での理解をするような工夫が見られているかと思います。

また、小学校や地理と公民との系統性等も踏まえているという観点も重要かと思います。この点、東京書籍、教育出版、帝国書院、日本文教出版の4者については、系統性について十分配慮された内容になっているのではないかと判断をいたしました。

以上です。

○委員長 私からも意見を言わせていただきます。

まず先ほど申し上げたところですが、教科書は基本的には授業において使用される主たる教材であり、教師が授業を展開するに当たって使いやすく、生徒にとってもわかりやすいものでなければならないと思っています。今回それぞれの教科書を読んでみますと、いずれも歴史の流れを学ぶことができるように構成されているとは思いますが、改めてこの教科の特徴だと思いますが、教科書の各ページは文章も多く、国語の能力が低い生徒にとっては、歴史を学ぶこと以上に文や文字を読むことに苦勞を強いられる教科であると感じました。私が過去に出会った中学生も、歴史は好きだ、つまり、先生の話は聞けるけれども、教科書を読むのは大変だという生徒が結構いたことを覚えています。その点、どの出版社も読みにくい漢字には振り仮名がつけられていて、漢字の苦手な生徒にも読みやすい配慮がなされているようです。

ところが、ある市民の方からもご指摘いただいたことではありますが、漢字であらわされている外国の人名などにつきましては、日本語読みとともに、外国の現地の発音に近い言い方が片仮名で示されているわけです。どちらを優先して覚えればいいのかということでは各者さまざまなようです。私は、生徒にとってわかりやすいとか、覚えやすいということが大事だと思っておりますので、原則として、現在、日本で一般的に言われている言い方を優先して、必要に応じてその国での発音を参考として示すことが一番いいのではないかと思います。外国に行くと、それが通じないということもあるのかもしれませんが、あくまでも日本で学んでいる子どもたちにとっては、わかりやすい読み方が一番

いいと思っております。そういう観点からしますと、東京書籍、帝国書院、育鵬社などは、そうした配慮がなされていると思いました。

それから、学習指導要領によりますと、歴史的分野を学習する際の目標の（１）に、「歴史的事象に対する関心を高め、我が国の歴史の大きな流れを、世界の歴史を背景に、各時代の特色を踏まえて理解させ、それを通して我が国の伝統と文化の特色を広い視野に立って考えさせるとともに、我が国の歴史に対する愛情を深め、国民としての自覚を育てる」とありますが、この中で、世界の歴史を背景にして、我が国の歴史の大きな流れを広い視野に立って考えさせるということが極めて大事だと私は思います。

そうした観点から、教科書には、日本史分野と世界史分野が適切な関連を図りながら取り上げられ、それぞれの分量にも配慮されている必要があるのではないかと思います。その点、東京書籍や帝国書院の教科書は、日本史分野と世界史分野のそれぞれの分量が適切であり、先ほど森山委員も言われましたように、小学校の既習事項とか、地理、公民との関連についても配慮している意図がうかがえると私は思いました。

私の考えは以上でございます。ほかにご意見ございますか。――よろしいですか。

それでは、投票に入ります。

（投票）

○教育総務課長 集計が終わりましたので、発表いたします。

東京書籍 2 票、帝国書院 2 票、日本文教出版 1 票。以上です。

○委員長 ただいまの報告のとおり、3 票以上獲得した発行者はございません。2 票獲得しました東京書籍及び帝国書院の 2 者で、第 2 回目の投票を行いたいと思います。

投票の前にご意見ございますか。

私からもう 1 点意見を言わせていただくとすれば、歴史の流れは、古くは人権が十分に守られていなかったところから、だんだん人権の重要性が認識されてきたという歴史だろうと思うのです。そういう意味で、帝国書院の教科書には、「人権」というテーマの囲み記事が随所に載っていて、そういうことが示されているのも、今、人権教育を大事にしているのは町田市だけではありませんが、そういう意味でも、歴史を学びながら人権教育も自然に学ぶことができるということで、東京書籍と比較するなら、帝国書院がいいかなと私は思います。

ほかにいいですか。私だけちょっと引っ張るような意見を言ってしまった。――よろしいですか。

それでは、投票に入ります。

(投票)

○教育総務課長 集計が終わりましたので、発表いたします。

東京書籍 2 票、帝国書院 3 票。以上です。

○委員長 ただいまの報告のとおり、東京書籍 2 票、帝国書院 3 票、帝国書院が過半数の 3 票を獲得しましたので、社会（歴史的分野）は帝国書院に決定いたしました。

続いて、社会（公民的分野）に移ります。ご意見をいただきたいと思います。

○高橋委員 公民について述べたいと思います。

これからの世の中は、地域、日本、世界という枠で、環境、エネルギー、防災、安全、人権、平和など、さまざまな課題が次々と出てきます。そのような課題にしっかりと向き合い、自分自身も社会の一員として公共の精神を保ち、主体的に社会の形成に参画する責任があることをしっかり学べ、持続可能な社会をつくり出す一員となる、そのような教科書を選びたいと思い、調査研究してきました。

そのために、中学生が、自分も社会の一員であること、社会で起きているさまざまな出来事は自分と関係があることを自覚させながら学習を進めていくことが大切だと思うので、その点において、私は、教育出版が、中学生が無理なく素直に学習に入っていける工夫や配慮がなされていると感じました。各章に入る前に、学習内容に沿ったいろいろな場面で活躍している中学生の写真が数枚出てきます。公民という分野を系統的には初めて習う中学生にとっては、社会を身近に感じる、そのような写真となっています。章の終わりの「言葉で伝え合おう」という箇所では、さまざまな課題についてみずからの考えを言語化し、それを互いに発表し、考え合うという協同的探究学習の場をしっかりと設けています。また、公民を学習した最後には、これまで学んださまざまな課題の中で、自分にとって最も切実な課題を選んで、「未来への私の約束」と題したレポートを作成させ、ともに生きる社会の実現に向けて、自分がどう考え、何ができるかなどをまとめさせています。単元教材の系統性の配列が、最後のこのレポートへ向けてきちんと考えられていると思いました。

次に、東京書籍は、章の初めに示してある現代の身近なテーマは、漫画を用いるなど、中学生の好奇心をくすぐるような内容となっていて、学習への意欲が湧くように工夫されている点がすぐれていると思います。学習の最後は、「持続可能な社会の形成」をテーマとしたレポートを書かせることで、社会の課題に関心を持ち続け、その解決のために自分ができることを実践していけるようにと考えられています。

育鵬社は、学習の初めに、「人生モノサシ」を示して、中学生が自分の過去、現在、未来を考えながら、これからの公民を学習していけるようにしています。また、章の初めには、「〇〇の入り口」という項目があり、中学生の学習意欲や関心を引き出す工夫がなされています。学習の最後は、「私は内閣総理大臣 『持続可能な社会』を築いていくための国づくり構想を立てよう」というレポートを作成することになっています。着眼点としてはおもしろいとは思いますが、内閣総理大臣となった自分として考えることは、社会の中の一員として考える視点から余りにもかけ離れていて、まとめとしては飛躍し過ぎていると思いました。この点は残念だと思います。

ほかに日本文教出版も帝国書院も、学習内容が充実していてよいと思いましたが、やはりその中でも教育出版が一番よいと私は思いました。

以上です。

〇八並委員 私は、帝国書院の各部の初めにある見開きのイラストの「学習の前に」というのは、学習の見通しを立てたり、その中から子どもたちが発見などをする学習に非常によいのではないかと思います。また、帝国書院のコラムには、環境、人権、平和、高齢化のそれぞれのテーマにより記事があり、大変興味深いものでありました。

東京書籍では、章の初めのイラスト、またキーワードがしっかりと示されており、学習するときには、非常に意識して学習に取り組めるのではないかと思います。また、東京書籍の「深めよう」というコラムは大変興味深い記事を扱っていました。

以上です。

〇教育長 公民的分野については、先ほども申し上げましたが、学習指導要領の教科の目標に「公民的資質の基礎を養う」ということが示されていますので、子どもたちに政治や経済の基礎をきちんと学んでほしいという観点、そのために、それぞれの事象が多面的、多角的に取り扱われていて、それをもとに、子どもたちがみずから主体的に判断ができる、そういう資質を養えるようにしたいというような観点が必要だと考えています。そういう意味では、これも先ほど申し上げました協同的探究学習にも有効なものをとというふうに思っています。

今回の7者の教科書をそのような観点から見ますと、私は、帝国書院、東京書籍、教育出版がすぐれていると思いました。この3者の教科書は、いずれも平易な文章で、写真やグラフ、新聞や漫画などを活用して、子どもたちの興味関心を高める工夫がされています。また、それぞれの章に、現代社会が抱える諸問題に対して、多様な立場や考え方を認識し

た上で、多面的、多角的な視点から解決を目指すことができるというような多くのコラムや特設ページが用意されています。これらの課題には、子どもたちの生活に身近な課題が多く取り上げられていますので、多様な意見が出やすいということと、みずからの考えも発表しやすいということで、協同的探究学習を行うにも大変有効だと思っております。

以上です。

○森山委員 私から申し上げたい点は、公民的分野というのは、個人の尊厳をはじめ、人権の尊重、民主主義そのものの意義、国際的な中での世界平和の実現あるいは福祉の問題まで包含するわけですので、ある面では内容の取扱いに複雑さを抱えています。しかしながら、生徒たちが今後大人になって、公民として生きていく中での重要な基礎、資質能力を養う、そういう非常に大きな特徴があろうかと思えます。そういう中で、発行者の内容についてはそれぞれ工夫が見られます。

特に生徒の学習意欲とか関心を引き出すという観点から見ますと、東京書籍、教育出版、帝国書院、日本文教出版、育鵬社については、いろいろな工夫が見られると思えます。

内容につきましては、基礎的、基本的な内容と、発展的な内容が、どのような形でわかりやすくそれぞれの教科書に工夫がなされているかという観点からしっかりと見せていただきました。その中では東京書籍、教育出版がよいと思いました。

清水書院につきましては、基礎的、基本的な内容に比べて、発展的な内容が、少しウエートが高いという特徴があるかなと思いました。

帝国書院、日本文教出版については、東京書籍、教育出版と同様に、適切でバランスよく、基礎基本と発展的内容が教科書の中に工夫して盛り込まれているのではないかと思います。

あと、育鵬社につきましても、基礎的、基本的な内容と発展的な内容の構成というのが適切に示されていると判断をいたしました。

この中でも、東京書籍、教育出版、帝国書院の3者が、全体的に教科書として採択するのにふさわしいものではないかという判断をいたしました。

以上です。

○委員長 私からも一言述べさせていただきます。

先ほど高橋委員が、総理大臣だったらという課題に対しては、少し評価が低かったようですけれども、思い出しますと、私自身、小学生だったか中学生だったか忘れちゃけれども、その課題を与えられて一生懸命考えた記憶があります。それはそれでおもしろい課

題だなど今も思っているのですが、高橋委員のような見方もあるのだなどということはこの場で知りました。

私の意見としましては、まず学習指導要領に示されている公民的分野の目標の(1)を、またここでも紹介させていただきますと、先ほど森山委員もこの目標を取り上げているのだらうと思いますが、「個人の尊厳と人権の尊重の意義、特に自由・権利と責任・義務の関係を広い視野から正しく認識させ、民主主義に関する理解を深めるとともに、国民主権を担う公民として必要な基礎的教養を培う」、このようにあります。いずれの教科書もおおむねこうした趣旨が盛り込まれた構成になっていると思いました。

特に東京書籍が編纂した教科書では、人権に関する学習内容が充実しておりまして、要するに人権が大事だという一般的な学習だけでとどまらずに、その人権が侵害されたいわゆる差別問題を具体的に提起して、公民の学習を通して、人権教育にもプラス面があるのではないかと思います。

昨今いじめの問題が大きく取り上げられておりますが、いじめ問題も人権侵害でありまして、いじめ問題そのものについて、いろいろ学習する前提として、そういう人権についての勉強をしっかりとっておかないと、具体的ないじめ問題の指導につながらないのではないかと考えます。もちろん公民的分野だけの話ではありませんが、公民的分野ではこういう問題を取り上げるところがありますので、そういう意味で充実しているかなと思いました。

それから、人権が尊重されてくるのに対して、それではその義務はどうなっているのかということも昨今指摘されてきたところです。公民的分野の目標、先ほど紹介しましたように、「自由・権利と責任・義務の関係を」というふうに、「責任・義務」のことも同時に勉強することになっておりまして、東京書籍でも、人権問題とともに、公共の福祉とか義務についてもバランスよく取り上げられているのではないかなと私は思いました。

なお、今回の教科書採択と直接関係はありませんが、学習指導要領に示された公民的分野の内容は、1「私たちと現代社会」、2「私たちと経済」、3「私たちと政治」、4「私たちと国際社会の諸課題」と、大きく4つにまとめられておりまして、ここでは政治よりも経済が先に並べられています。私は政治よりも経済を先に学習するスタイルもあるのではないかなと思っていたのですが、今回の採択候補本は全て政治が先になっていましたので、どちらが先のほうがよいのかということにつきましては、今後も検討していきたいと思いました。

私からは以上です。ほかにご意見ございますか。よろしいですか。

それでは、投票に入ります。

(投票)

○**教育総務課長** 集計が終わりましたので、発表いたします。

東京書籍 3 票、教育出版 1 票、帝国書院 1 票。以上です。

○**委員長** ただいまの報告のとおり、東京書籍が過半数 3 票を獲得いたしましたので、社会（公民的分野）は東京書籍と決定いたしました。

次に、地図に入ります。まず皆様からご意見を伺いたいと思います。

○**教育長** 地図については、パッと見ただけで、2 者の地図の色合いとか色調に大きな差があることがわかります。これは好みによるものと思いますが、私は帝国書院のほうの方が明るく鮮明という印象を受けました。また、地名とか山の高低差といったことについても、帝国書院のほうの方がはっきりしていてわかりやすいと感じました。1 点、索引の文字の小ささが気になりましたが、情報量の多さや協同的探究学習にも活用できる資料も多いことなどから、私は帝国書院を推したいと思っています。

ただ、先ほど地理的分野で東京書籍が決まりましたので、同じほうがいいのかなということもありまして、少し迷っております。

以上です。

○**八並委員** 私も、色彩がはっきりしている帝国書院の地図は非常に使いやすいのではないかと思います。ただ、教育長が述べられましたように、同じ会社のものでなくても構わないという調査協議会の報告がありましたが、比較して見た場合には、地理の教科書と地図とは同じ発行者のものの方が使いやすいのではないかと考えております。

ただ、東京書籍のオリンピックの資料として、このたび廃案になりました新国立競技場のデザインが載っており、そこは、この案が採用されていれば、非常にいい教材の 1 つになったのではないかと思います。廃案になってしまったので、これをどのように取り扱ったらよいかというのが非常に迷うところだと思います。

○**委員長** なるほど。また同じ案になるかもしれませんね。

○**森山委員** 私は、東京書籍、帝国書院、どちらも非常に特徴が出ておりまして、どちらの教科書も充実した地図帳であると思われました。その中で、特に内容に即して写真を多く取り入れているのが東京書籍であると思えます。これについては、特に生徒の学習意欲を向上させるといいますか、地図を開きたくなるような気持ちにさせる工夫であると感じま

した。

一方、帝国書院は、色彩が非常に豊かで、先ほど来、各委員からもお話がありましたとおり、イラスト等で生徒の意欲を高めるという意味では、これも東京書籍とまた違った意味で生徒の意欲を高めていると思いました。

系統性についても、地図を見るという面についてはそれぞれ工夫がなされていて、どちらというのはなかなか難しいような感じがいたしました。そういう意味では、先ほど他の委員も述べられましたが、地理的分野との関連ということを視野に入れることも1つの要素であると感じております。

以上です。

○高橋委員 地図について述べさせていただきます。

私はどちらの地図帳も、多少の違いはあるものの、地図の学習を支えるには十分な内容だと思っています。東京書籍は、地図の使い方が2ページで説明されていますが、帝国書院のほうは5ページにわたり詳しく説明されていて、さすがという思いが湧きました。地図を正しく読み取るためのノウハウをきちんと理解して、地図を調べることができると思います。

色調につきましては、今3人の教育委員が、帝国書院は色が鮮やかでよいとおっしゃいましたけれども、私の感覚では、帝国書院は明る過ぎて、特に関東地方の地図など、開けますと、黄色の部分が蛍光塗料のように光って見えるので、蛍光灯のもとではすごく見にくくなって、目に刺激が強いと感じています。その点、東京書籍は落ちついた色合いで、中に書いてある文字が読み取りやすいと思います。ということで、どちらも一長一短があるように私は感じていますが、先ほど地理的分野の教科書に東京書籍が選ばれました。私は同じ会社の地図帳を選ぶほうがよいのではないかと考えています。

以上です。

○委員長 色合いを大分気にされていますけれども、私は色合いなど、選択の場合の第3か第4の条件だろうなというくらいに思っています。好みの問題に近いのではないかなと思います。

私は、そういう意味で、色合いも含めてそれほど差はないと思いますが、内容の構成も大体同じで、最初に世界の地図が並んで、次に日本の地図が並んで、最後に資料のページが続く。これはどれも同じような構成だと思うのですが、決定的な違いがあって、アジアの次にヨーロッパが来て、アフリカに続くというのが東京書籍であるのに対し、帝

国書院は、アジアの次にアフリカが来て、ヨーロッパが続く、こういうところが違うと思います。

私は、先ほど地理的分野のところ、取り上げる順序を気にいたしました。順番が先のほうが丁寧に扱うというわけではないでしょうが、地図のところでは、順序よりも、アフリカに割いているページ数が気になりまして、これを比較してみますと、帝国書院は少なく、東京書籍のほうが多いという結果でした。かなり差があると思います。こういう点から、地理的分野のところ、私が気にした順序で言えば、帝国書院かもしれませんが、アフリカに関する地図や資料を多く取り入れているということから判断いたしまして、私は東京書籍が編纂した地図を推したいなと思っています。

ほかにいかがでしょうか。皆さん、アフリカについてはどう思いますか。決してアフリカを持ち上げようとしているわけではないのですが、どうしてもアフリカに関する勉強が、大人はまず少ないと思います。子どもたちも、アフリカのことを、ほかの州と同じくらいにもっと勉強すべきだなと思っているのは、私だけでしょうか。

ほかはよろしいでしょうか。

それでは、投票に入ります。

(投票)

○教育総務課長 集計が終わりましたので、発表いたします。

東京書籍 5 票。以上です。

○委員長 ただいまの報告のとおり、東京書籍が満票でした。決して私のせいではないと思うのですが、5人の教育委員の投票結果のとおり、地図は東京書籍と決定いたしました。

続いて、数学に入ります。それでは、まずご意見を伺いたいと思います。

○教育長 たしか昨年の小学校の算数の教科書採択のときにも私は申し上げたと思いますけれども、数学というと、一度わからなくてつまずくと、次に進む意欲がなくなってしまって、またそれを取り戻すことがなかなか難しい教科だと思っています。中学生になると、例えば最初から正の数と負の数といった抽象的な概念も求められてくる。そういう意味では、個人差があらわれやすいというような教科ですので、子どもたちの学習への興味を引き出す工夫とか、それを継続させる工夫があるかという観点で見させていただきました。

そういう観点の中では、導入段階や振り返りなどの段階で、特別なコーナーを設けたり、図解を取り入れたりしながら、いろいろな工夫が感じられた教育出版、東京書籍、あと学校図書といったところがすぐれていると思いました。中でも教育出版は、「みんなで数学」

というコーナーがあって、ペットボトルのキャップや基石などを使った題材で、「基本のたしかめ」もできることから、調査協議会の報告にもあるように、中1ギャップへの対応という意味でも、良い工夫だと感じております。

以上です。

○森山委員 数学に関しましては、学習指導要領の目標の中にも示されているとおり、基礎的な概念とか原理原則について学ぶ、理解をするということは当然ですが、もう1つ、数学的活動の楽しさ、あるいは数学のよさを実感するというところが非常に重要であろうかと思えます。先ほど教育長のお話の中にもありましたが、小学校以来、生徒たちはある程度苦手あるいは得意という形で大きく分かれるようなところもあろうかと思えますし、個人差もあって、個に応ずる指導も非常に重要な観点かと思えます。そういう意味では、特に身近な事例をしっかりと多く用いて関心意欲を引き出すような配慮をするというのが、この数学の教科書には特に重要なのではないかなと認識をしております。

そういう中で、東京書籍、学校図書、教育出版については、今のようなところにしっかりと軸足を置きながら、教科書の構成が具体的になされていると思えました。

以上です。

○高橋委員 数学について述べさせていただきます。

先ほど教育長もおっしゃいましたけれども、私も中学校の数学は、小学校で学んだ算数の上に積み上げていく教科書ですので、その橋渡しがきちんとなされている教科書であってほしいと願っています。また、小学校では、具体的なものを基本として学び、マイナスなどは出てきませんが、中学校では抽象的な数の概念を学びますので、基礎基本をきちんと学べ、生徒が興味関心を抱き、意欲的に取り組めるように工夫がしてあるものがよいと考えます。

算数から数学への橋渡しとしては、数研出版は、算数の復習を、1年生の初めのところに8ページ、東京書籍は巻末に9ページ、それぞれ詳しく載せてあって、数学でわからなくなったとき、算数へ戻れるように示してあり、中1ギャップへの配慮を感じました。数学の学習の進め方やノートのとおり方など詳しく説明することで、その後の学習がスムーズに進められるように大変工夫されていたのは、東京書籍と新興出版社啓林館でした。特に東京書籍は、協同的探究学習のやり方をわかりやすく説明し、学び合うことをノートづくりにも生かせる工夫を示していて、町田市の学力向上推進プランにもつながっていると感じました。

基礎基本をきちんと学べるという点では、例や例題でわかりやすく説明がしてあり、その後、定着のための問いや問題の数が多く示されている教科書がよいと思いますが、その点では、大日本図書と教育出版がよいと思いました。ところが、大日本図書は、連立方程式のときの解き方が、唯一、代入法を先にやって、加減法を後にやるようになっており、数学の先生にお話を聞いたことがあったのですが、このやり方はやりにくいということをお話されていました。

7者それぞれ特徴がありますが、調査協議会の報告の内容を検討して、町田市の子どもたちには東京書籍または教育出版が、中1ギャップにも、基礎基本の確立にも、よく対応していてよいと思います。

以上です。

○八並委員 私は、東京書籍では、身近な事例を多く取り上げているように感じました。「例題」、「たしかめ」、「問」、「やってみよう」という展開は、非常に理解しやすい展開になっていると思います。

また、「社会とつながる」、「数学をひろげる」といったコラムは大変興味深いものでしたし、「もっと数学しよう」という発展的な課題は、大変数学の興味を引くものだと思います。また各学年、1年生では「数学の世界へようこそ」、2年生では「数学をもっと深めよう」、3年生では「数学を探究し続けよう」、3年生の巻末には「科学や技術をささえる数学」という見開きのページになっており、それぞれ数学への興味を引くものではないかと思いました。

また、教育出版でも、同じように身近な事例が例題となっていて、節ごとに「基本のたしかめ」、章末には「学習のまとめ」、それから「章の問題」と、そちらも大変わかりやすい展開になっていると思いました。また、「数学の広場」の記事は大変興味深いもので、巻末の「自由研究」も大変豊富なのが非常に印象的でした。

以上です。

○委員長 私からですが、先ほど教育長が話されましたように、算数から数学になると、かなり難しくなるという印象を持っている中学1年生はとても多いと思います。入学前からそういうおそれを持って入学してくる生徒は多いと思います。そういうことで、中学校で数学を始めるときの導入部分での丁寧な配慮が必要だと思われそうですが、こういう点では、どの教科書もよく力を入れていると思います。

特に教育出版が編纂した教科書では、各章に入るときに、小学校で学んだ問題を用意さ

せて、小学校との関連が図られるようにしていますし、ほかの章でも、その章に関連する既習事項に関する問題に取り組みせたりして、小学校から中学校へ、また中学校の中でも、前回の内容から、これから始める内容にというふうにつながられるような工夫がなされているという点では、教育出版が、そのことによく力が入っているなと思いました。

学校図書につきましても、小学校の学習を思い出させる工夫がなされていますが、さらに各節や各章の学習が終わった段階におけるまとめの問題も、スモールステップの章問題が出題されていて、学習したことを丁寧に確認できるようにしておりますし、「クローズアップ」と名づけた資料には、数学に関するミニ知識が取り上げられ、数学に対する興味を湧かせることができるのではないかと思います。加えて、印刷された文字などが、ほかの教科書に比べてくっきりと読みやすいなという印象を受けました。どの教科書も授業で使用する際に特別な課題はないと思いますし、東京書籍の教科書は使い慣れている教師が多いということも聞いておりますけれども、私は学校図書が編纂した教科書を推したいと思います。

ほかにご意見ございますか。

それでは、投票に入ります。

(投票)

○教育総務課長 集計が終わりましたので、発表いたします。

東京書籍 2 票、学校図書 1 票、教育出版 2 票。以上です。

○委員長 ただいまの報告のとおり、過半数を獲得した発行者がありません。東京書籍 2 票、教育出版 2 票、この両方で第 2 回の投票を行いたいと思います。

(投票)

○教育総務課長 集計が終わりましたので、発表いたします。

東京書籍 3 票、教育出版 2 票。以上です。

○委員長 ただいまの報告のとおり、東京書籍が 3 票獲得いたしましたので、数学の教科書は東京書籍と決定いたしました。

ここで一旦休憩をいたします。再開は午後 1 時ちょうどとさせていただきます。理科の教科書から採択を始めます。

午後 0 時 01 分休憩

午後 1 時 00 分再開

○委員長 それでは、再開いたします。

午後の最初は理科の教科書の採択を行います。まず委員の皆様からご意見をいただきたいと思います。

○高橋委員 では、理科について述べさせていただきます。

日本は資源の少ない国ですが、現在このように発展したのは、世界でもトップレベルの高度な科学技術と、精巧で緻密なものづくりの技術に支えられたことが大きいと思います。今後も日本の高度な科学技術が次の世代へと引き継がれ、さらに発展していくためには、科学者や技術者となる人材を育てていく必要があります、そのためにも中学校での理科の学習は大変重要であると認識しています。また、これからの世界は地球規模で持続可能な社会を構築していかなければならず、環境についての研究や、環境に影響の少ないエネルギー開発など、全世界を挙げて協力して研究開発していくべき課題がたくさんあります。子どもたちが理科を学ぶことの意義や有用性を実感でき、科学への関心を高めるような内容が充実している教科書を選びたいと思って調査研究いたしました。

東京書籍は、今述べたように、日本の科学技術の案内というところで、「from J A P A N ニッポンの科学」という読み物が単元の終わりに必ず載っていて、単元の中で学んだ内容における日本の科学技術の現状やその開発の経緯について、2ページにわたり紹介しています。そのほか「科学でGO!」や「科学の本だな」というコラムもあり、生徒たちを科学へと目を向けるように導くとともに、さらに深く学習したいときの手だてとして本を紹介するなど、意欲関心を引き出す工夫がなされています。この点は大変評価するところ です。

学校図書では、「科学を仕事に活かす～はたらく人たち～」ということで、やはり単元ごとに、単元の内容に関係する職業を紹介したり、実際働いている人へのインタビューを載せたりと、これもまた日本の科学技術について、より具体的に、2ページにわたり示してありました。その他の3者も科学技術への関心を高める工夫がありましたが、東京書籍と学校図書は特によいと思いました。

次に、実際に自分の目で見る観察や、自分の手で行い、結果を確かめる実験は、科学的な思考力や科学的に探究する能力の基礎と態度が養われる上で大変重要だと思っております、その点では、大日本図書が最も多く取り扱っていて大変よいと思っています。調査協議会や調査研究委員会の報告書を見ましても、東京書籍と大日本図書、どちらも評価がよいということで、私はこの2者から、ほかの教育委員の意見を聞いた上で選びたいと思っています。

ます。

以上です。

○八並委員 私は、東京書籍と大日本図書におきましては、生命、物質、エネルギー、地球というような構成になっていて、それぞれの学年がそのような構成になっているのは大変わかりやすいと思いました。

それに加えて、学校図書、教育出版では、いわゆる第1分野から第2分野、新興出版社啓林館におきましては、第2分野から第1分野という構成になっておりました。

東京書籍では、章末に「学習内容の整理」、「確かめと応用」とあってわかりやすい展開になっていると思います。「学びを広げよう」というコラムは大変興味深く、「科学の本だな」のコラムでの本の紹介は非常によいと思いました。教科書の最初に「理科室の決まり」が載っており、実験などの安全意識を高めるためには非常に有効であると思われました。

大日本図書につきましては、単元の初めにそれぞれ構成が載っており、学習の見通しがつきやすいことから、学習効果が上がるのではないかと思います。終章に「学んだことを活かそう」と、巻末の「課題研究」は大変豊富で、非常に興味を広げるものであると思われました。

以上です。

○森山委員 理科につきましては、「科学的に探究する能力の基礎と態度を育てる」、「科学的な見方や考え方を養う」というところが学習の大きな目標になっているかと思います。そういう意味では、5者ともに、それぞれの発行者によって非常に興味関心を引き出すような工夫が見られるかと思います。

東京書籍では、単元の導入のところに、非常に視覚に訴えるといいますか、豊富な写真をたくさん使っています。あるいは図表を用いて、生徒みずから興味が出るような内容になっている、そういう配慮がなされているかと思います。

大日本図書においても、単元の導入のところで、しっかりとした系統性が、物理あるいは化学分野、生物分野、地学分野といったそれぞれの分野が系統的に明確に示されているということで、これは生徒の学習において非常に明確にそれぞれの専門の分野が理解できるような配慮がなされているかと思います。

学校図書については、各単元にしっかりとした工夫が見られます。これはそれぞれ基礎操作というのでしょうか、それがはっきりとまとめられているというところに特徴がありました。

教育出版についても、系統的に生徒がわかりやすく整理しやすいような形での技術、新興出版社啓林館においても、特に発展的な内容を多く取り扱っていますが、その内容の割には非常にわかりやすい文章で記述されているというところで、よさが出ているかと思えます。

特に大日本図書については、加えて小学校での学習内容を確認するところで、いわゆる小学校から中学校への系統的な取り扱いの記述がはっきりとしています。このあたりが大きな特徴であると思っております。

それぞれの発行者で工夫がなされておりますが、東京書籍の「新編 新しい科学」、大日本図書の「新版 理科の世界」の2者においては、特にそのあたりが明確に出ていると思えます。

大日本図書では、3年生の教科書で、生物分野の2つの単元が連続して取り扱われています。この点についても、内容の系統性というのを理解できるかなと思ひまして、評価をしています。

私としては、東京書籍、大日本図書の2冊が、教科書の採択にふさわしいのではないかと判断いたしました。以上です。

○教育長 理科については、科学的な思考力、表現力の育成を図るといような観点から、観察や実験あるいは調べ活動の充実などが求められていると考えています。今回5者から候補本が出されているわけですが、東京都教育委員会が作成している教科書調査研究資料の中の「観察・実験を取り上げている箇所数」というところを見ますと、大日本図書が1位、次いで東京書籍、新興出版社啓林館という順番になっております。

理科に対する子どもたちの興味や関心を引き出したり、わかりやすい各分野の章立て等の工夫というのは、各者とも特徴を出しながらしっかり押さえられていると思ひました。そういう意味では、各者拮抗している状況といえると思ひますが、その中でも、私は大日本図書と東京書籍については、観察・実験の取り扱いが多いただけあって、写真や挿絵を豊富に使いながら、観察や実験の方法などについての説明がとても丁寧で、基礎・基本をわかりやすく教えていると感じました。

特に子どもたちがみずから課題を発見して、その課題の解決に主体的に取り組ませるとい観点では、大日本図書が余計な解説を入れないといるか、解説に誘導されない、シンプルで、より子どもたち自身に考えさせるような取組に配慮した書き方になっていると感じました。

以上です。

○委員長 最後に、私からも意見を述べさせていただきます。

物質とかエネルギーを使う第1分野と、生物や地学的な現象を扱う第2分野、古くは教科書も分かれていたというふうに、皆さんもご記憶があると思いますが、その2つの分野、今回の理科の学習内容は、第1分野、第2分野と分けることができますが、学習指導要領には、各学年とも、どちらの分野も同じくらい取り上げることと示されているところでございます。

そういう意味では、いずれの教科書も学習指導要領に示された内容で構成されているということにつきましては特段の課題はないと思いますが、よく見ますと、取り上げる単元の順序に違いがあり、私はこのことについて一言見解を述べたいと思います。

1年生の教科書について申し上げますと、まず東京書籍と大日本図書は、最初に第2分野の「植物の生活と種類」が取り上げられ、次に第1分野の「身のまわりの物質」と続きます。ところが、学校図書と教育出版はその逆で、最初に出てくるのが第1分野の「身のまわりの物質」で、その次に「植物の生活と種類」が続きます。また、新興出版社啓林館は、最初に第2分野の「植物の生活と種類」が出てくることは東京書籍などと同じですが、その次も第2分野の「大地の成り立ちと変化」でありまして、第1分野はその後に出てくる、そういう並べ方になっています。

初めて中学校の理科の授業を受けるに際しては、まず校庭とか公園などで身近に目にする植物を取り上げて、観察という活動に取り組むのが自然ではないかと私は思います。理科の授業に慣れて、理科室の使い方などを学んだ後に第1分野に入り、本格的な実験を経験していく、こういう順序がいいのではないかと思います。もちろん指導計画は教科書の順序に従う必要はないわけですが、教科書を手にした中学生にとっては、教科書の取り上げられた順序に学んでいくほうが自然だと思います。

こうしたことを考えますと、東京書籍か大日本図書がいいのではないかと思います。東京書籍は図や写真等が豊富で、文字もくっきりとしていて読みやすく、わかりやすい教科書ではないかと思いました。大日本図書は、現行の教科書であり、何人かの現場の理科の先生にお聞きしますと、現行の教科書も大変使いやすいと話していました。そういうことで、私は東京書籍か大日本図書を推したいと思っています。

先ほど高橋委員から、科学技術がこれからの日本の大事な方向性ということでお話があって、私も同感ですが、そうはいつても、科学技術者ばかり育てるわけではないので、理

科の目標である科学的な見方や考え方を全ての国民が身につけるという意味で、理科の学習指導というのはとても大事だなと思います。決して高橋委員の意見を否定したわけではありませんが、大事なのは全ての国民が科学的な見方や考え方ができるということではないかと思っております。

ほかにございませんか。

それでは、投票に入ります。

(投票)

○教育総務課長 集計が終わりましたので、発表いたします。

東京書籍 1 票、大日本図書 4 票。以上です。

○委員長 ただいまの報告のとおり、大日本図書が 4 票と過半数をとりましたので、理科の教科書は大日本図書に決定いたしました。

続きまして、音楽（一般）に移ります。まず皆さんからご意見をいただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

○高橋委員 私は教育委員になりまして、中学校を訪問したり、また連合音楽会や各中学校の合唱コンクールに参加したりと中学生の合唱を聞く機会に多く恵まれました。子どもたちの歌声に毎回感動をもらっています。合唱のまち町田と呼んでもよいと思うくらい、町田市の中学校では合唱が盛んであり、その実力も定評のあるところですよ。

音楽の教科書を選ぶ際、この合唱ということをも 1 つのポイントとして選びたいと思いました。また、音楽は私たちの人生に大きくかかわってくるものであり、明るく豊かにしてくれますから、その音楽の基礎を十分学べる教科書を選びたいと思っています。

合唱の基礎である歌う姿勢や声の出し方、呼吸の仕方、また豊かな響きの歌声のつくり方、その練習方法、これらが詳しく載っていたのは、教育芸術社のほうです。また、調査協議会の報告にも載っていましたが、魅力的な合唱曲を多く取り扱っているとありました。町田は小学校でも合唱が盛んですので、小学校との連携も、やはり教育芸術社は配慮してありました。また、合唱のときは指導者を見ながら歌うのですが、合唱コンクールのとき、クラスの生徒の中から指揮者が選ばれます。指揮の指導についても図が多く、詳しい説明があるのは、教育芸術社のほうでした。もう 1 つの観点、音楽の基礎を十分に学べる教材が多いというところでは、両者とも押さえられていると報告書からも読み取れます。

以上のことから、私は教育芸術社のほうがよいと思っております。以上です。

○八並委員 私も高橋委員と同じように、合唱が盛んな町田にとってどのようなものがい

いかということを観点に思いました。高橋委員と同じように、教育芸術社では、「My Voice!」として、声の響かせ方、2年生では思いを乗せる歌い方など、歌唱の注意点がわかりやすく載っておりました。また教育出版でも、「Let's sing!」ということで、歌う姿勢、発声の仕方などが書いてありましたし、それぞれの教科書では指揮の仕方も詳しく載っておりました。教育芸術社では、「音楽学習MAP」によって、歌唱、創作、鑑賞の系統性がわかりやすく目次の次に載っておりました。また学習の窓口としていろいろなマークが示されていますが、それが非常に学習のポイントをつかむものになっているのではないかと思います。

また、教育出版では、ページの左端には学習目標、右端には新しく出てきた音楽記号や、鑑賞などでは、作者の生き抜いた時代の年表などが載っていて、学習の理解を助けるものだと思います。

両者を比較しますと、より詳しい説明が載っているのが、教育出版であるように感じましたが、授業においては、どちらの説明の仕方のほうが、より授業しやすいのだろうかというのが迷うところです。

以上です。

○教育長 音楽では、音楽文化についての理解を深めるということで、表現教材とか鑑賞教材の充実といったことが観点になると考えますが、教育出版のほうは、写真や絵が豊富に使われていて、また、歌唱教材なども数多く掲載されています。また、ワークシートなどのようなものも多く出てきて、理論的に子どもたちにわかりやすいように説明がなされていると感じました。

一方の教育芸術社のほうは、実践的で、必要な要点に絞った解説があって、表現・鑑賞教材については適切な分量であると考えています。二者択一ということで迷うのですが、どちらかというところ、教育出版のほうは、この教科書どおり進めると、子どもたちがあまり考えない。もしかすると、先生のほうも考えないかもしれない。教育芸術社のほうは、調査協議会の報告にもあるとおり、実践的で、説明し過ぎない記載であるために、先生が授業展開をしやすい。言いかえれば、先生方の力量を問われるということになるかもしれませんが、子どもたちの気付きを促したり、みずから考えさせたりということに対しては有効ではないかと思っています。小学校との連携に配慮したつくりになっているということもあわせて、私は教育芸術社を推したいと思います。

以上です。

○森山委員 音楽においては、表現と鑑賞という2つの活動が軸になるわけですが、そういう観点から見ますと、教育出版も教育芸術社も、この表現と鑑賞を明確に教科書の中で示しています。例えば、写真あるいは作者のエピソードとか、伝統的な名曲とか、いろいろな形で工夫をして構成しています。特に教育芸術社におきましては、内容について鑑賞曲とか創作を関連して扱っているところが、この教科書の大きな特徴かと思います。そういう意味で、内容が精選されていると言ってよろしいかと思います。

もう1点は、それぞれの目標が生徒たちにわかるようにはっきり示されているという意味で、教育芸術社の教科書のほうが使いやすいのではないかと思います。ただ、先ほど教育長のお話にもありましたように、教育芸術社のテキストはいわゆる先生の力量を問われるというような状況もあろうかと思います。それに比べて教育出版のほうは、生徒に対する説明が非常に事細かに示してあるという特徴を持っていますから、どちらがいいのかというと、なかなか難しいところですが、私は教育芸術社の教科書を採択することを希望しています。

以上です。

○委員長 私からも一言お話しさせていただきます。

先ほど高橋委員や八並委員から町田は合唱が盛んだというお話がありましたが、教科書採択に当たってはこの観点は必要ないのではないかなと思います。間違いなく町田市の中学校は合唱が盛んです。中には昨年度の話ですが、全国で1位になったという合唱を披露する学校もあるくらいですから、合唱が盛んなことは私も全く同感です。しかしながら、音楽教育は合唱だけではなくて、今森山委員が表現と鑑賞というふうにおっしゃいましたが、表現も、合唱だけではなくて、作曲があったり、器楽があったり、いろいろな表現があって、そして鑑賞があってということですので、町田市の中学校は合唱が盛んだから、その合唱にふさわしい教科書をということではなくて、私は音楽教育全体を通して考えたほうがいいのではないかなと思っています。

学習指導要領に音楽の目標が示されていますが、「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、音楽を愛好する心情を育てるとともに、音楽に対する感性を豊かにし、音楽活動の基礎的な能力を伸ばし、音楽文化についての理解を深め、豊かな情操を養う」と表現されております。こういう音楽の目標が達成されるには、どちらの教科書がいいのかなという目で比較したのですが、先ほど教育長がおっしゃいましたように、格段2者のどちらかがということについての決め手は、私にはありませんでした。ただ、教育出版の教科書の場合は目

次が整然としていて、ねらいが単元単位で示されているなど、わかりやすいなという印象を受けました。教育芸術社の教科書も、教育出版の教科書と比べて遜色はなく、しかも、町田市に勤める教師には使い慣れているというお話を聞いたこともあります。私はあえて教育出版を推したいと思っております。

以上です。

ほかにご意見ございますか。

それでは、投票に入ります。

(投票)

○**教育総務課長** 集計が終わりましたので、発表いたします。

教育出版1票、教育芸術社4票。以上です。

○**委員長** ただいまの報告のとおり、教育芸術社が過半数の4票を獲得いたしましたので、音楽（一般）の教科書は、教育芸術社の教科書と決定いたしました。

続いて、音楽（器楽合奏）に移ります。それではまず、皆様からご意見をいただきたいと思えます。いかがでしょうか。

○**八並委員** 私は、教育芸術社では、音楽と同じように器楽でも「音楽学習MAP」が示されており、学習の見通しが持ちやすいと思えました。それぞれの楽器では、種類、構造、調律、姿勢と構え方、奏法が最初にわかりやすく載っており、リコーダーについては運指を示した後に、練習をするという繰り返しで、非常に習得しやすい構成になっているのではないかと思われました。

教育出版では、箏の部分では、「もののけ姫」の曲などを取り上げ、身近なわかりやすい曲を取り上げていると感じました。各ページの端に運指や記号を示していて、それは学習したり習得するには非常に理解を助けているものではないかと思えました。

以上です。

○**高橋委員** 器楽分野について述べたいと思えます。

町田市の中学校では、子どもたちはアルトリコーダーを使って演奏をしているようですが、それについては両者ともアルトリコーダーについての学習もできるようになっているので、どちらを選んでも遜色はないと思えます。また、取り上げている楽器の種類別の数については、教育出版は、打楽器について、教育芸術社よりも少し少ないように思いますので、その点については、教育芸術社のほうがよいかなと考えています。また、小学校との連携を配慮しているのも教育芸術社というふうに調査研究委員会の報告書には載ってい

ましたので、その点でも教育芸術社のほうがいいと思います。総合的に考えて、私は器楽分野もやはり教育芸術社を選びたいと思います。

以上です。

○森山委員 音楽（器楽合奏）ですが、この教科書につきましては、教育出版、教育芸術社ともに大きな差はないといえますか、どちらも目標と内容を踏まえた上で、目次にねらいというところも共通しているところがあり、非常にわかりやすいと感じています。その中で、特に基礎的な内容から学習しやすいように系統的に考えて配列されているのは、教育出版のほうではないかという感じがしております。特に基礎的内容からアンサンブルに移るところなど、非常にわかりやすく、生徒たちが学びやすく進められている、そういう構成になっているのではないかと思います。

教育芸術社につきましても、全体的にはやはりわかりやすい表現を使っています。そういう意味では、教育芸術社についても、生徒がなるべくつまずきにくい配慮もしておりますので、私としては、どちらもそれぞれの工夫がなされていて、2者しかございませんが、非常に悩んでいるところでございます。

○教育長 私は音楽（一般分野）のところで申し上げたことと同様の意見でございます。一般分野と器楽分野については同じ会社のほうがいいと考えております。

以上です。

○委員長 私も一言意見を言わせていただきます。

器楽活動の教科書が2者から用意されましたが、どちらを採択しても特別な違いはないだろうというのがまず私の意見です。小さなところで気になったことをお話しさせていただくとすれば、それぞれの楽器を演奏する奏者の写真が最初に出てくるところで、それが男性であったり、女性であったりしているというところなんです。ギターと篠笛は、教育出版が女性、教育芸術社は男性です。箏と三味線は、教育出版が男性、教育芸術社は女性です。

楽器によってそれを奏でる者に男女差はなくなっていると思いますが、私のような年代からしますと、やや固定的な印象があります。そういう意味では、男性が扱う楽器か、女性が扱う楽器かというような固定的な印象を消し去るということでは、教育出版のほうがいいのかなと私は思いました。

ただ、教育芸術社は、ボンゴとかコンガなどの打楽器を取り入れている。これは高橋委員も先ほど評価されておりましたが、さまざまな打楽器を取り入れているという点からは、

教育芸術社を評価しております。ここでどちらか投票しなければならないのですけれども、この発言の段階ではちょっと迷っているところでございます。

ほかにご意見ありますか。よろしいですか。

では、投票に入ります。

(投票)

○**教育総務課長** 集計が終わりましたので、発表いたします。

教育出版 2 票、教育芸術社 3 票。以上です。

○**委員長** ただいまの報告のとおり、教育芸術社が 3 票獲得いたしましたので、音楽（器楽合奏）の教科書は教育芸術社に決定いたしました。

次に、美術に移りたいと思います。美術は 3 者から教科書の候補本が用意されました。皆様からご意見をいただきたいと思います。いかがでしょうか。

○**教育長** 美術については、「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、表現する能力、鑑賞する能力を育てる」ということが目標として言われています。今回 3 者の中で、これは好みの問題というふうにも思いますが、一見してレイアウトに統一感があって、鑑賞作品等で視覚に訴えるものを感じたのは、光村図書出版でした。特に風神・雷神像、阿修羅像、それからピカソのゲルニカなどの写真が非常にインパクトがございました。

実際のところ、学校では、美術の時間の中でも鑑賞の時間というのはなかなかとれない、まして本物を鑑賞する機会は大変少ないというお話を伺っております。子どもたちがこのような教科書を見たことを契機に、本物を見たい、あるいは美術館へ行きたいと思ってくればありがたいと思っております。

以上です。

○**八並委員** 私もどの教科書も作品が大変充実していて、色彩も美しく配列されていることに感動いたしました。特に光村図書出版では、巻頭に谷川俊太郎さんの「うつくしい！」という詩を載せてあったり、「美術 1」の折り込み・見開きになっている風神・雷神像の紹介には、アーサー・ビナードさんの詩が、「美術 2・3」の自画像の制作のところには、アンジェラ・アキさんの「手紙～拝啓十五の君へ～」、折り込み・見開きになっているゲルニカには、谷川俊太郎さんの「生きる」という詩などが載っており、作品の理解を助ける工夫がされていて、大変印象的でした。

以上です。

○**森山委員** 美術の教科書に関しましては、まず開隆堂出版は、発展的な内容として、も

のすごくインパクトのある作品が示されています。参考作品で生徒の興味を引き出していくという意味で、教科書としての価値が非常に高いものだと思います。

光村図書出版については、先ほどからも評価のお話がありましたけれども、巻末の資料が非常に充実していると思っております。特に基礎的な技法についての解説が明確になされていて、生徒が巻末の資料を開いてすぐに見られるというのはよいところだと思います。

先ほどの開隆堂出版と同様に、日本文教出版も応用作品が充実しています。そういう意味では、3者ともに生徒の興味関心を非常に高めるような作品の提示があるのが共通するところですが、特に光村図書出版の巻末資料については、評価しております。

以上です。

○高橋委員 美術について述べたいと思います。

美術は音楽と同様に、人生を豊かにし、感性を磨いてくれ、創作活動をする中では、ほかからは得がたい喜びや楽しさを与えてくれる教科です。創作活動とともに、ほかの人の作品を見る、または芸術家の作品や、日本の伝統的な作品を見るときに鑑賞する目や力、鑑賞の仕方なども、中学生のうちに身に付けていけば、それは生涯の宝となり得ると思いますので、創作するための技術の基礎とともに鑑賞する力、どちらもバランスよく学べる教科書を選びたいと思います。

先ほど森山委員もおっしゃったように、3者のうち、創作活動の基礎となる表現技法、材料、用具の扱い方などが具体的に示してあるページが一番多かったのは、光村図書出版で20ページでした。巻末に資料として載っていましたが、大変よくまとまっていて参考になるものだと思います。創作活動中、迷ったり、わからなくなった場合、何度も教科書を開いて見直すことができ、基礎の定着に用いられると思いました。教科書に掲載されている作品数に関しても、総数で言えば光村図書出版が一番多く、美術作品が日本や海外、また暮らしの中のもの、どれも最も多く載っています。

今回、3者ともに作品の見せ方に工夫がなされていて、大変おもしろいと思いました。光村図書出版は、風神雷神図屏風が見開きで大きく載っていますし、火焰型土器や、正倉院蔵の平螺鈿背円鏡の一部分を大きく拡大して、どのようなつくりになっているのか詳しくわかるように見せるなど、私も初めて細かな部分まで見ることができ、感動しましたが、同じように子どもたちも感動して見るのではないかと思います。

開隆堂出版では「原寸ギャラリー」と題して、モナ・リザと樹花鳥獣図の原寸大の作品

の一部が載っていましたし、見開きの大きな紙面に5作品もの作品が載っていました。開隆堂出版は、ほかの2者に比べて、デザインや工芸の割合が絵や彫刻よりも多いので、これは特徴的なところだと思います。

日本文教出版は唯一の3分冊で、なおかつ、ほかの2者より教科書自体が大きいので、作品が十分な余白の中にあって見やすく、見応えがあると感じました。芸術家の作品でも、生徒の作品でも、ほとんどに作者からコメントが載っているので、作品に対する思いを知ることができ、作品を言葉であらわすという表現力も学べる点で大変よいと思いました。

それぞれの出版社でよさがありますので、選ぶのには大変迷いますが、今のところ、光村図書出版のものが、中学生には一番ふさわしいのではないかと考えています。

以上です。

○委員長 3者から教科書が出されておりますが、いずれも絵や彫刻など、デザインや工芸など、学習に役立つ資料、こういう3部構成で表現あるいは鑑賞の指導に効果的であるという内容が取り上げられているということでは、どの教科書を採用しても大きな違いはないと思います。

細かなことで違いを見つけるとすれば、今、高橋委員も報告されましたけれども、開隆堂出版及び光村図書出版の教科書は、2年生、3年生を合わせて1冊であるのに対し、日本文教出版は、2年生、3年生を合わせた教科書が上・下2冊に分かれているという違いがあります。私はこれは大変活用しやすいだろうな、2年生の段階で上巻を使いながら、もし進み方が速くなれば、途中で下巻を使うということで、大変使いやすいなと思いましたし、日本文教出版の教科書には、日本画の鑑賞を学ぶページに和紙を使うという工夫も見られ、学習に役立つ資料も充実していると思われまます。そうした観点から、私は日本文教出版を推したいと考えています。

ほかにご意見ございますか。よろしいですか。

今、私は、2年生と3年生の教科書を1冊にまとめないで、上・下分けたほうがいいのではないかなと思ったのですが、ほかの委員の皆さんは、このことについては何かご意見ありますか。特にないですか。あまり私のように評価はされないということですね。わかりました。

それでは、投票に入ります。

(投票)

○教育総務課長 集計が終わりましたので、発表いたします。

光村図書出版 3 票、日本文教出版 2 票。以上です。

○委員長 ただいまの報告のとおり、光村図書出版が過半数の 3 票を獲得いたしましたので、美術の教科書は光村図書出版と決定いたしました。

次に、保健体育に移ります。それでは、皆さんからご意見をいただきたいと思えます。いかがでしょうか。

○高橋委員 保健体育について意見を述べたいと思えます。

ここ数年、日本の自殺者の数が減り、3 万人を切る状況となり、大変よい傾向だと私は思っておりますが、それでも先進国の中では高い自殺率であることは変わりません。中学校の保健体育の中で、命の尊厳についてや、心の健康のための教育を十分にしてほしいと心から願っているところです。最近では、新たな薬物として、違法ハーブなどが出てきて、社会的にも問題になっています。このところもその危険性をしっかり教えてほしいと願っています。

このような観点も入れながら教科書を調査研究いたしました。心の健康については、各者きちんと取り上げ、ストレスに対する対処法などを示しています。

大修館書店では、「心もかぜをひく」など、心の不調は誰でも経験する可能性があり、1 人では抱えきれないときには誰かに相談することを勧め、相談できるところとして公的機関も詳しく紹介しています。東京書籍も同じく相談窓口を紹介し、先輩からのメッセージとして、松井秀喜さんの「いじめられている君へ 立ち向かわなくてもいい」が掲載され、中学生に配慮が見られます。

学研教育みらいでは、ストレスの原因を減らすためにコミュニケーションの方法が大切だということで、発展的学習として取り上げられていて、実生活に中学生がすぐに生かせる点で、これも中学生への配慮を感じます。

次に、命の尊厳についてですが、東京書籍の「胎児を育てる母体の神秘」という資料や、助産師の方からのコラムは大変効果的だと感じました。

次に、薬物についてですが、大修館書店は 4 ページにわたり詳しく危険性を示し、違法ハーブについては 1 ページを割いて、生徒に薬物の使用について問いかけています。

次に、熱中症についてです。今年の夏は大変暑く、熱中症への注意が毎日のように呼びかけられていますが、大日本図書は、熱中症への対応と予防を 2 ページにわたり詳しく示しています。東京書籍や大修館書店でも取り上げられています。熱中症について保健体育の中できちんと学べることは、私は今後の人生を考えても大事だと思っております。

以上、4者ともそれぞれよい点があり、選ぶのは大変難しいのですが、ほかの委員の意見を聞いて決めていこうと思っています。以上です。

○森山委員 保健体育の教科書につきましては、4者それぞれが非常に工夫をしております、これがいいというような大きな差が私にはあまり見当たりませんでした。

例えば現代的な課題である防災教育とか、防犯、被害の防止とか、そういう現代の保健体育にかかわる内容を、アップ・ツー・デートに、生徒の直近の課題として明確に捉えるという工夫が、東京書籍、大修館書店では見られます。東京書籍では、「やってみよう」、「考えてみよう」という部分があります。これは生徒がただ専門的な内容を学ぶというだけではなくて、それをまさに自分のものにしていくという意味では、非常にわかりやすく、工夫が見られると思います。

また、大日本図書におきましては、体育と保健の部分が体系的に示されていて、教えるほうも生徒のほうも理解がしやすいのではないかという感覚を持っております。

最後の学研教育みらいについては、いろいろな発問をし、それに対して回答していく、そういう内容も充実していて、これはこれでまた生徒の興味を引く、あるいは学習が効果的に行われる、そういう細かい配慮が見られるというような感想を持っております。

今のところ、私としては横並びといいますか、なかなか難しい選択であると思っております。以上です。

○教育長 保健体育というのは、「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育てる」、また、「生涯を通じて自らの健康を適切に管理し、改善していく資質や能力を育てる」ということが、教科、分野の目標とされています。こういう趣旨を踏まえて、今回4者で教科書を作成しているわけですが、これまで委員の皆様からもお話がありましており、各者とも、体育編、保健編という構成の順番こそ違うところがありますが、各章の導入での関心を引き出す配慮とか、さまざまなコラム、コーナーを設けての解説、あるいは巻末のまとめとか資料などもさまざまな特色ある工夫がされていて、どれも充実していると感じました。

その中で、大修館書店については、もともと高等学校で大きなシェアがあるとお聞きしておりますけれども、ネットワーク犯罪に関して有効なコラムでの解説があるということがありますが、若干内容が難しいのかなという印象を受けました。

残りの3者については、それぞれに特徴ある工夫があって拮抗しているのですが、その中で、学研教育みらいについては、各章ごとに小学校で学習したこと、高校で学習するこ

と、そういったような小中高とのつながり、系統性に配慮が見られます。また、調査協議会からの報告書の中でも、協同的探究学習を促せるような内容があるということ、それから、A B判というのでしょうか、教科書の大きさについて、大きいほうが使いにくいといったような指摘があることから、町田市の状況には、学研教育みらいの教科書を推したいと現在は思っています。

以上です。

○八並委員 私も教育長が述べられたと同じように、各者とも大変充実していて工夫されていると思いましたが、その中でも私がとても気に入った記述が多かったのは、大日本図書の教科書で、見開きの初めに、「だれもが健康で住みよい世界にしよう」という学習目的が示されておりました。章の初めに「この章で学習すること」、章末の「学習のまとめ」では、重要語句が整理されていてわかりやすいと感じました。また、「考えよう」、「学習を生かして」というコラムでは、大変興味深い記事を取り扱っておりました。

特に私が気に入ったところは、保健の思春期のところで、「異性に対する理解と尊重」、「責任ある行動」という項目が、本文の中だけではなく、項目として取り上げており、人としてのコミュニケーションに対する基本的な考え方がしっかりと示されているのではないかと思います。

また、食事の單元には、食事のバランスゴマが載っていたのもとてもよいと思いました。また、感染症の記述のところでは、H I Vなど、間違った知識により、差別が生じることがあるというような記述があり、感染の正しい知識を持つことが人権教育に通じるということが示されていたものが大変興味深いと思いました。

学研教育みらいは、大変わかりやすい構成になっており、特に「ウォームアップ」や「エクササイズ」による設問、「活用しよう」という実践の項目は大変よいと思いました。また、各ページの下に「情報サプリー」として「豆知識」やリンク先などが示されていて、そういうことによって学習が広がっていくのではないかと思います。

以上です。

○委員長 それでは、私から少し意見を述べさせていただきます。

まず皆さんに考えていただきたいことですが、保健体育の授業は、各学年で年間105時間、3年間で315時間の授業を行う。つまり、週2～3時間行っていく。こういうことで皆さんのイメージのとおり、保健体育の授業というと、校庭とか体育館で実技を行うというのが大部分を占めているわけです。

いわゆる保健分野は教室で行うことが多いと思いますが、学習指導要領には3年間で48単位時間程度行う。3年間で48単位時間ということは、授業で言えば、16時間ぐらいを1年間で主として教室で行う。そのときにこの保健体育の教科書を使うだろうと思います。

体育分野、体育編と言ったらいでしょうか、いわゆる体育理論を学ぶのは、学習指導要領には、各学年で3単位時間以上配当すること。つまり、体育理論を学ぶのは1年間で3時間ぐらいだということです。保健が3年間で48時間、体育理論が各学年3時間ぐらいずつということで、この保健体育の教科書に教材として載っている。

もう1つは、先生方にお聞きいたしましたら、これは主に競技のルールなどが載っている本だと思いますが、町田市多くの中学校では、体育実技を副教材として用意している。また、学校によっては、保健ノートというのを副教材として用意して、そこに書き込むような形で保健分野の授業もやっている。こういう中で、保健体育の教科書はどれを選んだらいいかというのが、今ここで議論されているのだらうと思うのです。

保健体育の教科書には、いずれも保健編の単元が4つと、体育編の単元が3つ並べられています。体育編の3つの単元は、学習指導要領に示されている「体育分野」の中の体育理論であって、運動やスポーツの多様性ということは1年生で、運動やスポーツの意義や効果については2年生で、文化としてのスポーツの意義については3年生で、それぞれ3単位以上の時間を使って勉強すると学習指導要領に示されています。

保健分野は、先ほど言いましたように、3年間で48時間以上の時間を使って、4つの単元について学習すると決められています。こうした単元の並べ方を比較してみますと、東京書籍が編纂した教科書は、学年ごとに学習する単元が並べられています。他の出版社の教科書は、保健編と体育編とに分かれていて、必ずしも学習する順番にはなっていません。少なくとも体育編は、学年ごとの単元が決められていることから、東京書籍の教科書が使いやすいのではないかなというのが私の意見です。

先ほども他の委員からありましたように、東京書籍の教科書は、「傷害の防止」という単元の中で、防災教育にかかわる内容が充実しているというのは、私の調査による結果です。そういう意味で、私は東京書籍を推したいと思っております。

ほかにご意見ございますか。よろしいですか。

それでは、投票に入ります。

(投票)

○教育総務課長 集計が終わりましたので、発表します。

東京書籍 2 票、大日本図書 1 票、学研教育みらい 2 票。以上です。

○委員長 ただいまの報告のとおり、過半数の 3 票以上を獲得した教科書はございません。そこで、2 票獲得しました東京書籍と学研教育みらいで、2 回目の投票を行いたいと思います。

(投票)

○教育総務課長 集計が終わりましたので、発表いたします。

東京書籍 3 票、学研教育みらい 2 票。以上です。

○委員長 ただいまの報告のとおり、過半数を獲得いたしました東京書籍が保健体育の教科書と決定いたしました。

次に、技術・家庭（技術分野）に入ります。それでは、ご意見をいただきたいと思えます。よろしいでしょうか。

○高橋委員 技術について意見を述べたいと思います。

日本はものづくりにすぐれている国ですので、中学校の技術では、その卓越したものづくりの技術の基礎を、実習を通してしっかり学び、また現代社会の中で、日本特有の高い技術や、日本の伝統的なものづくりの技術が実際どのように使われているかを知る中で、日本のものづくりを支える能力を育成できるような教材が多く入った教科書を選びたいと思います。

協議会の報告書にありますように、日本の代表的な材料である木質材料についての説明や加工法の基礎がまず最初に学べるという点では、開隆堂出版と東京書籍が評価できると思います。その点、教育図書は、プラスチック、金属原材料の後に、木質材料の説明が出てくるので、日本の伝統的なものづくりの技術を学ぶことに関しては、配列に配慮が欲しいところです。

特に開隆堂出版では、木材のみを取り上げ、大変わかりやすく詳しく基礎技能を示していますが、東京書籍では、木材のほかに、金属やプラスチックの加工方法も同時に示しており、情報が一度に入ってくるため、開隆堂出版に比べて見にくくなっているのは残念です。

次に、日本特有の高い技術や日本の伝統的なものづくりの技術について、東京書籍では、「技術の匠」というコラムで幾つか紹介していることは評価できると思います。ほかの 2 者にも世界から高い評価を受けている日本の技術をもっと紹介してほしいと願います。

以上の点から見ていきますと、私は開隆堂出版と東京書籍のどちらかがよいと思ってい

ます。以上です。

○八並委員 私も開隆堂出版は、初めに木材、木工製作における記述が詳しく書かれており、大変よいと思いました。巻頭には「未来への夢をつなぐ『技術 (Technology)』」と学習目的が示されており、章の初めに「学習の流れ」が示され、章末の「学習のまとめ」などで大変わかりやすい構成になっていると思いました。

東京書籍では、基礎技術として木工と金属の作業工程が並べられておりますが、私は高橋委員とは違って、材料が違っていても同じような作業工程を経るということがわかるのはよいことではないかと思いました。また、製図についての詳しい記述があり、興味深かったです。

「技術のとびら」、「技術の匠」というコラムは大変興味深い記事でありました。付録として「防災手帳」がついており、防災教育の助けにもなると思います。ページの下にはQ & Aがあり、学習の興味を引くものになっておりました。右下にスカイツリーができるまでのパラパラ漫画といますか、パラパラ写真がありまして、それは私はとてもいいと思ったのですが、かえって授業の妨げにならないかと心配しております。

開隆堂出版のほうにも、ページの右上には、かんとか、そういったさまざまな道具が表示されており、ページの下には「豆知識」などもあり、こちらも非常に興味関心を引く工夫がされていると思いました。私もこの2つの教科書がいいのではないかと思います。

以上です。

○森山委員 技術・家庭の技術分野の教科書ですが、3者ともに、まずはそれぞれの領域で、基本的な内容が非常に明確に示されており、わかりやすく表現されていると思いました。

もう1点は、3者ともに共通して4領域がバランスよく構成されています。この点もそれぞれ充実していると言ってよろしいかと思います。

ただ、3者の中で、先ほど各委員からも出ましたが、「技術の匠」というところが特に生徒の関心を引くのではないかと思います。我々の普段の生活の中ではあまり触れることがない技術を自然に理解するには、このような「技術の匠」などはまさに有効であり、生徒が興味を持つ内容になっているかと思えます。

また、開隆堂出版では、具体的なわかりやすい例というのでしょうか、それが非常に多く使われています。技術科では、「生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技術の習得」ということが目標に掲げられていますので、そういう意味では、わかりやすい例、あるいは

具体例が充実しているのはよいと思いました。

以上です。

○**教育長** 技術分野では、今回3者から教科書が出ております。調査協議会の報告書を見ますと、先ほど高橋委員からもございましたが、木の歴史を持つ日本として、木材加工は外せないというような現場の先生方の思いが強く伝わってきます。

この観点で見ますと、先ほどほかの委員の皆様で議論があるところだというお話がありました。私は教育図書については、木質材料の説明が、プラスチックや金属材料の説明の後だったりすること、あるいは導入部分での子どもたちの興味関心を引くための工夫が少なかったりということで、どうも使いづらいというような印象を受けております。

残った東京書籍と開隆堂出版については甲乙つけがたいと思っておりますが、先ほども申しましたが、現場の先生方は、どうも教科書のサイズが大きいと使いづらいというような思いがあるようですので、それでいくと開隆堂出版かなと思っております。

以上です。

○**委員長** 最後に私からですが、技術分野の学習内容は、学習指導要領を開いてみますと、先ほど森山委員が4つの領域とおっしゃいましたが、それは「材料と加工に関する技術」、「エネルギー変換に関する技術」、「生物育成に関する技術」、「情報に関する技術」です。

その中で最初に出てくる「材料と加工に関する技術」の中の「生活や産業の中で利用されている技術」については、1学年の最初に履修させることというふうに示されています。この点がどうかと思っておりますが、3者の教科書を見ましたが、このことについてはどの教科書にも反映されておりました。

私の思いはほかの委員さんと同じでありまして、ものづくりの技術が日本の伝統や文化を支えてきたことにつきましても十分に触れる必要があると思っておりますし、中でも基礎的な技術を使って木材を加工するという体験はぜひさせておきたいなと思っております。そういう意味で、開隆堂出版あるいは東京書籍が編纂した教科書は採択にふさわしいと思っておりますし、開隆堂出版の教科書には適切な実習例が取り上げられておりまして、実習を中心とした技術科の授業になると思っておりますので、そういう授業に活用しやすいように思います。

私の意見はそういうことではございますが、ほかにありますか。よろしいですか。

では、投票に移ります。

(投票)

○**教育総務課長** 集計が終わりましたので、発表いたします。

東京書籍 2 票、開隆堂出版 3 票。以上です。

○委員長 ただいまの報告のとおり、開隆堂出版が過半数の 3 票を獲得いたしましたので、技術・家庭（技術分野）の教科書は開隆堂出版と決定いたしました。

次に、技術・家庭（家庭分野）に入りたいと思います。前に報告書をいただいたときに質問などさせていただきましたところ、技術・家庭の技術分野と家庭分野が、必ずしも同じ教科書会社である必要はないという回答をいただきました。また、ある先生からは、指導する側からすれば、そろっていないなくても問題ないけれども、もしかしたら、子どもによっては、戸惑う人もいるのかなという程度であったと思います。

それでは、皆さんからご意見をいただきたいと思います。

○高橋委員 家庭科について意見を述べたいと思います。

将来、子どもたちが自立して生活していくときに必要な基礎的な知識や技術を習得でき、社会の最小単位としての家庭について、その機能と重要性を深く理解し、みずからも家庭をよくする意欲や力を持てるような学習を取り扱う教科書を選びたいと思って調査研究いたしました。3 者ともそれぞれ特徴はあるものの、家庭に関することはきちんと学べると判断し、全体的なことや、ほかの分野での特徴をそれぞれ比べてみました。

東京書籍は、全体的に内容が基礎的、基本的で、中学生の発達段階に応じた内容となっています。他者に比べ、教科書が大きいので、盛り込まれている情報量が多く、写真や図なども大きく、生徒の興味関心を引きやすいと思います。特に食生活の分野での基礎技能の紹介などは詳しくて、大変わかりやすいです。和食の基本のだしのとり方も、混合だし、煮干しだしの両方があり、和食の基礎が学べる点は、日本の伝統文化の継承にもつながってよいと思いました。実習例でも、調理手順が写真で紹介され、大変わかりやすくなっています。

教育図書は、全体的にイラストは多いのですが、写真や実在の人物が少なく、あったとしてもやや小さくて、興味関心は引きにくいと思われます。よい点としては、消費生活の分野で、悪質商法の例や若者がひっかかる消費者トラブルの例などが具体的に詳しく載っていて、その解決や予防方法もきちんと示してあったり、消費者として積極的に社会にかかわっていく責任についても示してあるなど、子どもたちがすぐに役立つ内容となっていて、その点は大変評価できました。

開隆堂出版は、図や写真の構成を工夫し、生徒が学習内容を把握しやすくしています。衣生活の分野での衣服の取り扱いとして、手入れ方法に失敗例を用いて注意を促したり、

衣服の補修の仕方が4ページにわたり載っていたり、今ある衣服をいかに大切に着ていくかを示してあり、私はこのことは大変よい学びだと思っています。今現在、衣服をつくる人は減って、既製品を買う人がほとんどだと思います。これからは環境問題もありますので、その手入れ法や補修法をきちんと教えていくことがますます大切になってくると思います。

以上、3者のよい点をそれぞれ出しましたが、全体的に見て、中学生の意欲関心を引き、わかりやすいという点では、私は東京書籍または開隆堂出版がよいのではないかと思います。以上です。

〇八並委員 私も家庭科の教科書が大変充実しており、改めて私自身も学び直したいと思ったほどでした。

開隆堂出版では、ガイダンスとして「自立に向かって」、それから「共生社会に向かって」、「持続可能な社会に向かって」、「人やものとかかわりながら学ぼう」と、それぞれの単元の学習目標が最初に示されておりました。「家族・家庭と子どもの成長」の項目から始まっている構成が非常によいと思いました。

「参考」、「探究」、「発展」などでは、大変興味深い記事を取り上げており、「持続可能な社会をつくる」という章末では、考えを深める発展的な記事などを取り上げておりました。巻末に「未来に向かって」と、それぞれの職業を紹介しているのが印象的でした。

技術科のときと同じように、ページの右上には小さな写真が載っており、家族、家庭のページのところには幼児の表情、また、食や衣服のところでは、それぞれ食材などが載っており、学習の関心を引くものではないかと思います。ページの下「豆知識」も、とても興味深い知識が載っておりました。

東京書籍も、最初に「持続可能な社会を目指して」と大きな学習目標を示しており、「自分や家族・地域を守る日頃からの備え」、「実習を楽しく安全に進めよう！」という安全意識を高める紹介がガイダンスの前にあったことが非常に印象的です。

また、ガイダンスとして、「どんな自分になりたいかな」、「問題解決をする道筋」、「自分と家族との生活を見つめよう」は、家庭科を学ぶときに必要な関心興味を高めていくものだと思います。

特に東京書籍では、調理や製作での基礎技能がわかりやすく書いてあるのが印象的でした。「プロに聞く！」などの興味深い記事があったり、ページの下Q&Aは、学習の関心を高めるものだと思います。

以上です。

○**森山委員** 技術・家庭の家庭分野の教科書についてですが、家庭科の目標が示すとおり、「衣食住などに関する実践的・体験的な学習活動を通して」ということでは、教科書の内容が非常にわかりやすく、例えばレシピでもそうですが、実際にものをつくる、みずからつくってみるという形を重視した教科書でなければならないと思います。そういう点では、それぞれの3つの教科書は非常に工夫されて、特に写真等がある程度大きく使って、わかりやすいものになっています。

特にその中でも、これは2つの考え方があるかもしれませんが、教科書の規格のところでは、東京書籍が少し大きいということですが、逆に私は、広げてみて、写真が大きいものですから、例えば料理をつくるとかいうときにも、わかりやすく示されているという印象を受けております。大きいということの使いやすさと使いにくさという2つの面があるかと思えますけれども、私は肯定的に捉えました。

あと、4領域については、特に東京書籍と開隆堂出版の2者の教科書についてはバランスよく構成されているという感じを受けました。

東京書籍も教育図書も開隆堂出版も共通するところですが、ガイダンスによって3年間の学習の見通しが非常にわかりやすい。例えば東京書籍ですと、「どんな学習をするのだろう」というところとか、開隆堂出版ですと、表紙の写真と目次が大きく示してあって、3年間の学習が見通しを持って学べるところに、それぞれ工夫が見られると感じています。その中で、使っておられる先生方のご意見等も総合的に反映した上で、東京書籍と開隆堂出版の2つの教科書が望ましいのではないかと考えております。

以上です。

○**教育長** 家庭分野では、3者から教科書が出ているのですが、私はこの中で教育図書につきましては、全体として写真等も少なく、イラストを多用しているためなのか、やや読みにくい構成かなと感じています。

残った東京書籍と開隆堂出版については、開隆堂出版のほうが発展的な内容も多くて、どちらかという、基本的な内容の多い東京書籍よりは、解説が詳しいかなという印象を持ちました。また、東京都教育委員会が作成している教科書調査研究資料を見ますと、言語活動を取り上げている事項、箇所数が一番多いのは開隆堂出版となっています。できれば、技術分野と家庭分野とで、子どもの立場からすれば、同じ会社のほうがいいと思います。

以上でございます。

○委員長 私からですが、家庭分野の内容は4つの領域にまとめられておりまして、最初が「家族・家庭と子どもの成長」となっています。「家族・家庭と子どもの成長」の中の最初に「自分の成長と家族や家庭生活とのかかわりについて考える」という内容が出てくるわけですが、学習指導要領によりますと、「小学校の家庭科などの学習を踏まえて、第1学年の最初に履修させること」となっています。つまり、4領域の中の「家族・家庭と子どもの成長」を最初に学ぶという順序になるだろうと思います。

このことを踏まえて目次を見ますと、東京書籍は、第1章が「食生活と自立」となっております。教科書どおり進めますと、これでは学習指導要領のとおりにはいかないので、履修の仕方に工夫が必要になると思います。

その点、開隆堂出版が編纂した教科書は、第1章が「家族・家庭と子どもの成長」であって、先ほど申しましたように、初めに、私の成長と周囲の人々とか家庭の働きについて学ぶ、そういう構成になっていて、学習指導要領どおりに進められると思います。

それから、改めて家庭分野の学習の目標を理解したわけですが、自立ということがとても大きな中心的なキーワードになっているのだなと思いました。そういう点では、開隆堂出版の教科書では、第1章の学習に入る前に、「自立に向かって」というテーマで、自立について考える活動が行えるように工夫がされているというのも評価できると思います。そうした点から、私は開隆堂出版の教科書を推したいと今考えております。

以上です。

ほかにございますか。

では、投票に入ります。

(投票)

○教育総務課長 集計が終わりましたので、発表いたします。

東京書籍1票、開隆堂出版4票。以上です。

○委員長 以上の報告のとおり、開隆堂出版が過半数の4票を獲得いたしましたので、技術・家庭（家庭分野）の教科書は開隆堂出版と決定いたしました。

それでは、最後の教科、種目になりますが、英語に入りたいと思います。ご意見を願いたいと思います。

○教育長 英語については、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養

う」というような目標が示されております。これを踏まえて、今回6者の教科書が用意されているわけです。

調査協議会の報告書を見ますと、いずれの教科書もこの4技能をバランスよく扱っていて、多様な国の今日的な課題等を扱って、子どもたちの関心を引き出す配慮があるとされています。ただ、現在使用している学校図書については、1年生の文法語順が独自に一般動詞から始まるという点が指摘されていて、どうも会話に困難が生じるなどして、普通にbe動詞から始まるほうがよいというような報告がございます。

これを除いて考えると、私は、文字やイラストなどの見ばえがよくて、子どもたちの感性に訴える、例えばキング牧師の題材を扱ったり、今日的な課題で子どもたちに考えさせる設問の工夫がある東京書籍と三省堂あたりがすぐれていると思っております。

以上です。

○高橋委員 英語について述べたいと思います。

2020年、オリンピック・パラリンピックが東京で開催されることが決定している現在、生徒の英語を学びたいという意欲はこれからますます高まっていくと期待しています。そんな中学生が3年間英語を学ぶことで、英語を用いて外国の人に話しかけることができ、相互に少しでも理解し合えるくらいのコミュニケーション能力を養ってほしいと願います。そのためにも英語の教科書は、英語のコミュニケーション能力がきちんと身につくものであってほしいし、多様な国についての知識が得られ、また、自分自身や日本について英語で紹介する内容が示され、会話も充実している教科書を選びたいと思い、調査研究いたしました。

教育長がおっしゃったように、6者とも、聞く、話す、読む、書くの4技能をバランスよく取り扱い、基礎基本がしっかり学べるような内容となっています。これも先ほど教育長がおっしゃいましたように、現行の学校図書は1年生の文法で一般動詞から入っていますが、今回も6者の中で唯一、be動詞からではなく、一般動詞から入っています。この教科書を3年間使った現場の先生方の意見の中で、やはりbe動詞からのほうがよいのではないかという意見があるようです。小学校からの連携という部分では、一般動詞もよいと思いますが、文法を習得するときのしやすさから言えば、やはり私はbe動詞からのほうが、生徒にとってはよいように思っています。

残り5者の中の三省堂の「NEW CROWN」ですが、読む活動のための教材数が5者の中で最も多く、その分、多様な国についての記述も多く、また、職場体験や日本の伝

統文化、オリンピック招致のスピーチなどを扱っていて、生徒にとって関心のあることが英語を用いた表現で学べることは、学習意欲につながると思います。また、私は、読み物教材は、心に訴え、心を揺さぶるような内容のものを望みますが、その点でもよい内容のものが数多く入っていました。紹介のあったキング牧師のスピーチもその1つだと思います。コミュニケーション能力を高めるという点でも、文法のまとめ方のよさという点でも、私は三省堂の「NEW CROWN」が最もよいと思いました。

以上です。

○森山委員 各委員が述べられておられますように、それぞれの教科書は、工夫をしながら、聞く、話す、読む、書くという4技能をバランスよく取り扱っていると思います。

ただ、特に題材、内容につきましては、先ほど教育長あるいは高橋委員からお話がありました。私も、生徒の関心を引く内容あるいは題材が望ましいのではないかと思います。

そういう意味では、先ほどからお話がありましたように、東京書籍、三省堂、それから異文化理解、平和等の現代的な題材を取り上げた開隆堂出版は、内容の面、題材の面から見ても、非常に生徒の興味を引く、あるいは英語だけではなくて、いわゆる文化を学ぶという意味でも、価値の高いものではないかと判断をいたしました。そういう意味で、東京書籍、三省堂、開隆堂出版の3者の教科書が望ましいと現在のところは考えております。

以上です。

○八並委員 私も同じように感じております。どの教科書も大変よく構成されており、子どもたちに非常に触れてほしい内容の教材を工夫して取り上げられていると感じました。

また、ガイダンスとして、東京書籍では「Unit 0」、三省堂では「Get Ready」、開隆堂出版では「Let's Start」というような項目で、単元に入る前に、1年生では小学校の復習、2年生では1年の復習など、いろいろな形で学習の準備をしっかりと盛った教材が取り上げられていると思いました。

また、子どもたちの興味や関心を高める教材としてはそれぞれ工夫されており、ハリポッターやスポーツ選手などのコメントが取り上げられたり、先ほど高橋委員も述べられていましたが、キング牧師のお話だったり、より身近なアニメや絵本などの教材が取り上げられていたり、子どもたちに関心を高める教材があり、今の教科書だったら、私ももっと勉強したかなと思えるような教科書が大変多かったと思います。

以上です。

○委員長 私からですが、ちょっと脱線しますが、小学生が中学校に上がるに際して、特に町田市の小学生がということになります。小学校と中学校の違いとか、中学校に期待することとして、1つは部活動があります。それから、今は多少状況が違ってはいますが、昼食が弁当になる。もう1つ、英語が始まるということで、英語に対する興味関心が非常に高かったと思います。

しかも、中学校1年生で英語を学ぶ際に、とても新鮮な思いで取り組めたように思います。いわば学力的に皆スタートラインに立ったところで、それほど差はないというのが過去の状況だったと思います。最近、小学校における外国語活動が行われるようになり、新聞などを見ていると、これがまたもっと増えるというようなお話です。こういう状況になって、今は中学校入学時の段階で、既に英語に対する意欲の差とか、場合によっては学力差が出始めていて、今後も出始めるであろう、もう中学校特有の教科ではなくなってくるということがますます進むだろうと思うのです。

そういう意味で、第1学年の初めの英語の学習は、丁寧に進めることが大事であろう。つまり、小学校の段階でちょっと出遅れている小学生も、中学校で始めるところで十分復習も行って、皆同じスタートラインに立てるようにするということが重要だろうと思います。その意味で各教科書を見ていきましたところ、開隆堂出版、三省堂、教育出版、光村図書出版などは、そうした配慮がなされていると私は評価いたします。

それから、学校図書では、一般動詞を初めに学習するようになってはいますが、他の教科書は、全てbe動詞から学習するスタイルになっておりまして、どちらを先にしたらよいか。これは英語教育の専門家によっても、いろいろな意見があると聞いておりますが、私も高橋委員がお話しされたように、be動詞から学習するほうが一般的ではないかなと思います。一般的であることは、教科書6者の中の5者がbe動詞から始めているということでも、そのように言えるかと思います。

それから、開隆堂出版の教科書ですが、巻末についている資料は役に立つのではないかなと評価しているのですが、私の印象ですけれども、ほかの教科書よりは紙の質が少し悪いような感じがいたしました。紙の質は、内容と比べたら、さしたる問題ではないと思いますが、比較してみると、そんなふうに感じました。これらのことを総合的に考えますと、私は三省堂または東京書籍がいいのではないかと考えております。

ほかにいかがでしょうか。

では、投票に入ります。

(投票)

○教育総務課長 集計が終わりましたので、発表いたします。

東京書籍 3 票、三省堂 2 票。以上でございます。

○委員長 ただいまの報告のとおり、東京書籍が過半数を獲得いたしましたので、英語の教科書は東京書籍と決定いたしました。

以上で全教科についての採択結果が出ましたので、全ての教科、種目につきまして、もう一度ご報告させていただきたいと思えます。

国語、光村図書出版、書写、教育出版、社会（地理的分野）、東京書籍、社会（歴史的分野）、帝国書院、社会（公民的分野）、東京書籍、地図、東京書籍、数学、東京書籍、理科、大日本図書、音楽（一般）、教育芸術社、音楽（器楽合奏）、教育芸術社、美術、光村図書出版、保健体育、東京書籍、技術・家庭（技術分野）、開隆堂出版、技術・家庭（家庭分野）、開隆堂出版、英語、東京書籍。以上でございます。

以上で第 45 号議案の審議を終了いたします。

この後、2 つの議案審議がありますが、一旦休憩し、2 ～ 3 分お時間をいただいて、再開したいと思います。

休憩いたします。

午後 2 時 58 分休憩

午後 3 時 01 分再開

○委員長 再開いたします。

引き続き議案第 46 号「2016 年度使用教科用図書（小学校）の採択について」を行います。教育長、説明をお願いいたします。

○教育長 それでは、議案第 46 号についてご説明申し上げます。「2016 年度使用教科用図書（小学校）の採択について」でございます。

本件につきましては、義務教育諸学校の教科用図書の無償措置に関する法律第 13 条及び第 14 条並びに同法施行令第 14 条及び第 15 条の規定により、2016 年度使用教科用図書を採択するものでございます。

なお、小学校の教科用図書は、同法第 14 条及び同法施行令第 15 条に規定する同一の教科用図書を採択する期間内であるため、昨年に引き続き、別表の図書を採択するものでご

ざいます。

説明は以上です。

○委員長 以上で説明は終わりました。

これより質疑に入ります。ただいまの説明に関しまして、何かございますでしょうか。

○高橋委員 小学校の新しい教科書を使って約4カ月が経ちましたが、この教科書を使って、何か問題があるとか、支障があるとかいう報告はございますか。

○指導課統括指導主事 学校からは、教科書が替わったことによる混乱は特に感じていないという報告をいただいております。

以上です。

○委員長 ほかにございますか。

以上で質疑を終了します。

お諮りいたします。議案第46号は原案のとおり決することにご異議ございませんか。

(「異議なし」の声あり)

○委員長 ご異議なしと認め、原案のとおり決することにいたします。

次に、議案第47号「2016年度使用教科用図書(特別支援学級)の採択について」を審議いたします。教育長、説明をお願いいたします。

○教育長 議案第47号についてご説明を申し上げます。「2016年度使用教科用図書(特別支援学級)の採択について」でございます。

本件につきましては、義務教育諸学校の教科用図書の無償措置に関する法律第13条及び第14条並びに同法施行令第14条及び第15条並びに学校教育法附則第9条の規定により、2016年度使用教科用図書を採択するものでございます。

なお、公立小・中学校特別支援学級教科用図書につきましては、特別支援学級設置校より報告を受けまして各校の実情に即して別表のとおり採択するものでございます。

説明は以上でございます。

○委員長 以上で説明は終わりました。

これより質疑に入ります。ただいまの説明に関しまして、何か質問などありましたらお願いいたします。――よろしいでしょうか。

以上で質疑を終了します。

それでは、お諮りいたします。議案第47号は原案のとおり決することにご異議ございませんか。

(「異議なし」の声あり)

○委員長 異議なしと認め、原案のとおり決することにいたします。

以上をもちまして町田市教育委員会第1回臨時会を閉会いたします。

午後3時05分閉会